

非常に浅い。主軸方位はN-15°-Wを示す。

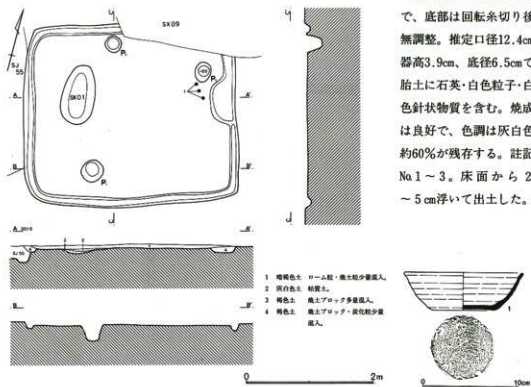
床面はほぼ平坦である。覆土はロームと焼土混じりの暗褐色土を基調とするが、堆積環境等の詳細は明らかにできなかった。

カマドは検出されなかった。本来、北壁に設置されていたものが竪穴状遺構構築時に破壊されたと考えられることもできる。

ピットは3本検出されたが、中世以降の所産と考えられる。また、住居中央から西に寄った位置に土壌が1基検出された。上面に灰白色粘土による貼床が認められたことから、住居に伴う床下土壌の可能性もある。

壁溝は深さ5cm程で全周するが、東壁部では幅広となり一段深く掘り込まれていた。

出土遺物は少ない。土師器甕が1点と須恵器杯が2点、須恵器甕胴部片が検出されたに留まる。時期決定するには資料不足ではあるが、第435図に示した坏から一応稲荷前Ⅲ期と考えておきたい。



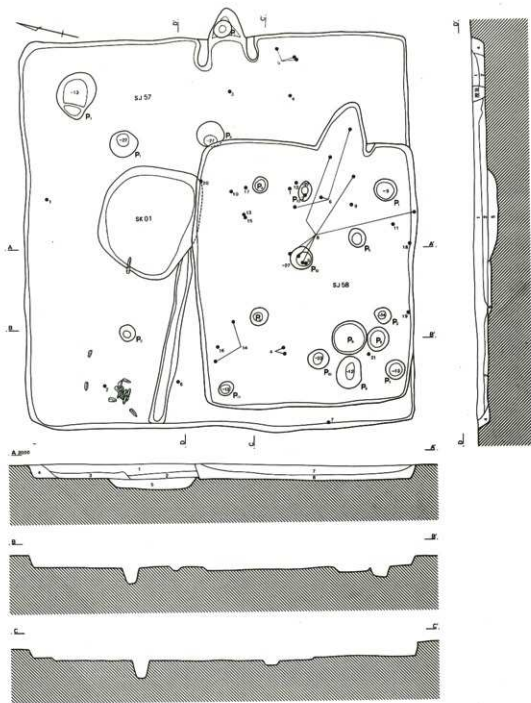
第435図 C区第56号住居跡・出土遺物

第435図1は須恵器杯で、底部は回転糸切り後無調整。推定口径12.4cm、器高3.9cm、底径6.5cmで、胎土に石英・白色粒子・白色針状物質を含む。焼成は良好で、色調は灰白色。約60%が残存する。註記No1~3。床面から2~5cm浮いて出土した。

C区第57号住居跡(第436・437図)

F・G-24・25区に位置し、重複する第58号住居跡に住居南半を破壊されていた。整った方形を呈する大形住居跡で、規模は長軸6.16m、短軸6.10m、深さ15~20cmを測る。主軸方位はN-74°-Eを示す。

床面は概ね平坦である。覆土は4層に分かれるが、焼土とロームブロックを多量に含む黒褐色土

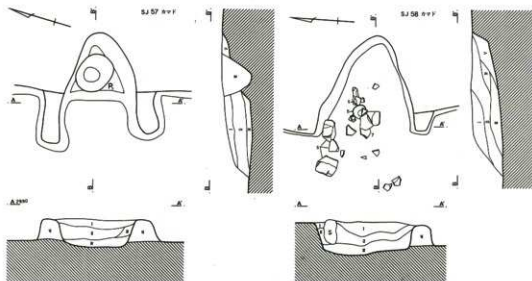


- 1 黒褐色土 焼土・ロームブロック多量混入。しまり地。シルト質。
- 2 黒褐色土 焼土・ロームブロック多量混入。シルト質。
- 3 黒褐色土 ロームブロック多量に混入。
- 4 黒褐色土 ロームブロック・ソフトローム・焼土多量混入。

- 5 黒褐色土 ロームブロックと黒色土が編状に堆積。
- 6 暗褐色土 ローム粒子混入。
- 7 黒褐色土 ソフトロームブロック少量混入。シルト質。
- 8 黒褐色土 ロームブロック少量混入。シルト質。

0 2m

第436図 C区第57・58号住居跡



S J 57カマド

- I 黒褐色土 ロームブロック多量混入。
- II 黒褐色土 ローム・焼土・炭化物と砂質粘土混入。
- III 黄褐色土 多量の砂質粘土と焼土粒子・ロームブロック混入。
- IV 褐色土 焼土ブロックとローム多量混入。
- V 赤褐色土 焼土主体でブロック状を為す。
- VI 黄灰色土 砂質粘土を主体とし、暗褐色土と黒褐色土混入。
- VII 暗褐色土 ローム粒子少量混入。

S J 58カマド

- I 黒褐色土 焼土ブロック・ローム多量混入。シルト質。
- II 黒褐色土 焼土ブロック・ローム多量混入。シルト質。
- III 黒褐色土 焼土・ソフトローム多量混入。シルト質。
- IV 黒褐色土 焼土ブロック・炭化物多量混入。シルト質。
- V 黒褐色土 ロームブロック多量混入。シルト質。
- VI 黒褐色土 焼土少量、砂質粘土・ローム多量混入。シルト質。

第437図 C区第57・58号住居跡カマド

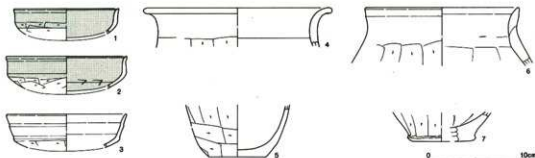
で構成され、あまり大きな土層変化は観察されなかった。

カマドは東壁に位置する。全長約90cm、焚口部幅60cmで、煙道部は壁を45cm切り込んで構築されている。また、煙道部に検出されたピットは土層観察からカマドを切っていることが判明した。燃焼部はほぼ壁内に納まり、底面は平坦で床面下の掘り込みは認められない。カマド覆土は6層に分かれ、第Ⅱ～Ⅶ層が天井部及び袖部の崩落土に相当しよう。第Ⅶ層はピット埋土。袖は黄灰色の砂質粘土を主体に構築され、遺存状態は比較的良好であった。

ピットは5本検出された。P₁・P₂は主柱穴となる可能性もあるが対応する柱穴が見出せず、配置は不明とせざるを得ない。P₃は楕円形プランで長径72cm、短径62cm、深さ13cmを測る。位置から見ると貯蔵穴となるかもしれない。その他、径1.75mを測る大形土塊が1基(SK01)検出された。断面観察から本住居跡に伴うものと判断された。埋土はロームブロックと黒色土が互層となり、明らかに人為的な埋め戻しと考えられる。

SK01から西壁に向かって延びる幅20cm、深さ5cm程の小溝が1条検出された。住居に伴う施設と推定され、間仕切り溝となるかもしれない。

出土遺物には土師器と須臾器があり、後者は混入である(第438図)。土師器は坏が16点、碗が1点、甕が6点、小形甕が1点、壺が1点検出された(何れも口縁部破片数)。坏は有段口縁坏が1点(第438図3)、模倣坏系の比企型坏1点、比企型坏14点という割合となり比企型坏の構成比が高い。良好な資料はないが、土器様相から7世紀前半代、稻荷前Ⅱ期～Ⅲ期頃と考えている。



第438図 C区第57号住居跡出土遺物

C区第57号住居跡出土遺物観察表(第438図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	組成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.0)	2.7		ABC	A	淡黄橙	20%	No19 覆土(+11cm) 赤彩
2	坏	(12.6)	3.4		ABC	B	にぶい橙	30%	No61 床面 赤彩
3	坏	(12.6)	3.5		ABC	B	にぶい黄	15%	No23 覆土(+22cm) 無彩
4	甕	(19.0)	4.1		ABC	A	にぶい橙	15%	No32 覆土(+6cm)
5	甕		5.5	6.0	ABC	B	にぶい黄	70%	No77-79 床面
6	甕	(16.0)	6.1		ABC	A	淡黄	10%	No67 覆土(+4cm)
7	甕		3.1	(7.2)	ABC	B	橙	30%	No73 覆土(+4cm)

C区第58号住居跡(第436・437図)

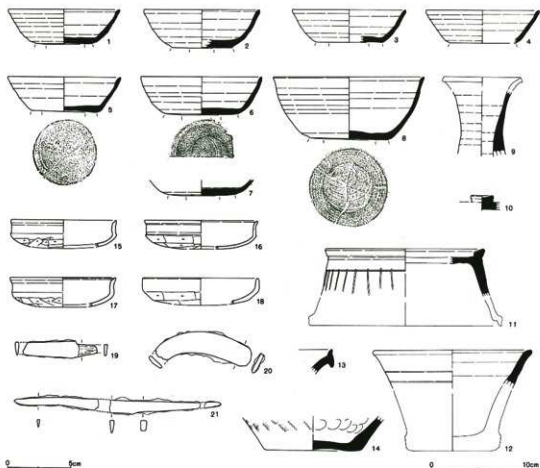
G-24・25区に位置し、第57号住居跡を切って構築されていた。形態は長方形を呈し、規模は長軸4.20m、短軸3.32m、深さ20cmを測る。主軸方位はN-78°-Eを示す。

床面は概ね平坦である。覆土は大きく上下2層に分かれ、ロームブロックを少量含む黒褐色土で構成されていた。

カマドは東壁に位置し、壁を70cm程切り込んで構築されている。最大幅は76cm、底面はフラットで床面下の掘り込みは認められない。燃焼部と煙道の区別は不明瞭であるが、燃焼部の主体は壁外にあるものと推定される。カマド覆土は5層に分かれ、第I~IV層は天井部崩落土、第V層は流入土に相当しようか。袖は右袖部が僅かに検出されたが、遺存状態は悪い。砂質粘土とロームを含む黒褐色土で構成されていた。カマド内からは礫が数点検出されたがカマドに使用されたものか否かは明確にはできなかった。

ピットは住居内から13本検出された。その大半は中世の所産と推定され、住居に伴う柱穴は確定できなかった。壁溝及び貯蔵穴は存在しない。

出土遺物には土師器と須恵器がある。土師器は坏と甕が検出されたが前者は混入である。須恵器は坏類が51点、蓋5点、甕2点、長頸瓶1点、磨鉢1点と円面硯が1点ある。須恵器坏は口径11cm代が中心となり(第439図1~5)、最大でも12.7cmである(6)。何れも底部は再調整されている。円面硯は内境がなく、脚部の裝飾は沈線による刻みが施されるのみとなっている。その他鉄器が3点検出された。19・21は刀子、20は鉄鎌状に湾曲するが、側面には刃が付されていない。須恵器坏類の様相から稲荷前IX期~X期、主体はX期にあるものと考えられる。



第439図 C区第58号住居跡出土遺物

C区第58号住居跡出土遺物観察表(第439図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	組成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.6)	3.7	6.0	ABC	B	灰黄	60%	No116 覆土(+10cm)
2	坏	(12.0)	4.0	6.4	ABC	C	灰白	45%	No154 床面
3	坏	(11.8)	3.4	(7.0)	ABC	B	灰白	25%	No103 覆土(+12cm)
4	坏	(11.8)	3.4	(7.0)	ABC	A	緑灰	15%	No58,60 覆土(+2~14cm)
5	坏	11.8	3.7	6.8	ABC	B	灰黄	95%	No175 カマド内
6	坏	12.7	4.0	(7.6)	ABC	A	灰	45%	No176,他 カマド内 112,他 覆土
7	坏		1.6	7.0	ABC	A	灰-7灰	70%	No166 カマド内
8	碗	15.8	6.6	8.2	ABC	A	灰	80%	No162,他 カマド内 101,他 覆土
9	長頸壺		6.8		ABC	B	灰黄	30%	No119 覆土(+21cm)
10	蓋				BC	A	明緑灰		No77 覆土(+4cm)
11	円面碗	(16.5)	5.0		ABJ	D	灰白	15%	No155 覆土(+5cm)
12	磨鉢	(16.3)	4.0		ABC	A	緑灰	10%	No117 覆土(+17cm)
13	甕		2.6		ABC	A	灰		No75 覆土(+21cm)
14	壺		3.6	(9.8)	ABC	A	灰白	35%	No6,13 覆土(+6~14cm)
15	坏	(11.0)	2.8		ABC	B	灰黄	20%	No76 覆土(+18cm) 赤彩 混入
16	坏	(11.8)	3.0		ABC	C	橙	15%	No7 床面 赤彩 混入

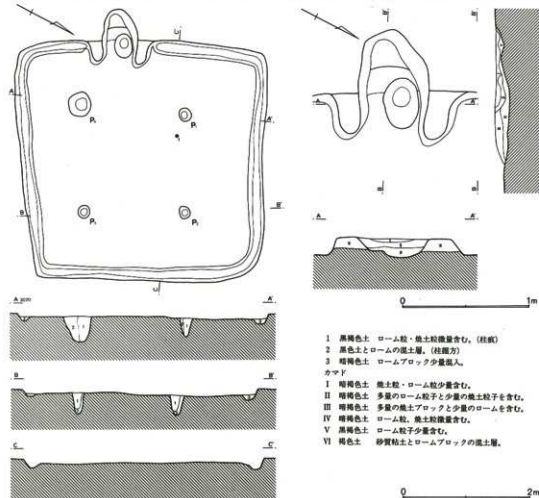
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
17	坏	(11.0)	3.1		AB	A	にお	20%	No80 床面 赤彩 混入
18	坏	(12.0)	2.7		AB	B	橙	20%	No142 覆土(+4cm) 北武藏系
19	刀子								No156 床面 残長6.0cm 最大幅1.4cm
20	鉄製品								No152 覆土(+9cm) 残長7.6cm
21	刀子								No157 床面 推定長約16.3cm

C区第59号住居跡(第440図)

調査区南端のJ・K-23区に位置する。形態は方形を呈し、規模は長軸3.80m、短軸3.74m、深さ10cmを測る。主軸方位はS-65°-Wを示す。

床面は平坦である。覆土は暗褐色土単層で土層変化は観察されなかった。

カマドは西壁に位置し、壁を50cm切り込んで構築されていた。袖部から先端までの長さは90cm、燃焼部幅55cmを測る。燃焼部底面にはビット状の掘り込みが検出された。煙道部は緩やかに立上がる。覆土は5層に分かれる。第I~III層が天井部崩落土に相当しよう。袖は砂質粘土とロームプロ



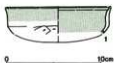
第440図 C区第59号住居跡・カマド

ックの混土で構築されていた。

ビットは4本検出され、何れも住居に伴う主柱穴と考えられる。壁溝は深さ10cm程でカマドを除いて全周する。

出土遺物は極めて少なく、土師器環と甕がそれぞれ1点(口縁部破片)出土したに過ぎない。第441図1は比企型環で赤彩されている。小片のため口径は不安定であるが比較的小振りとなろう。時期の限定は困難であるが、おそらく7世紀中葉前後となろう。

第441図1は土師器環で推定口径11.0cm。胎土に石英と白色針状物質を含み焼成は良好である。色調にはよい橙色。残存率は10%に満たない。註記No 3。覆土上面(床面上9cm)出土。



第441図 C区第59号住居跡出土遺物

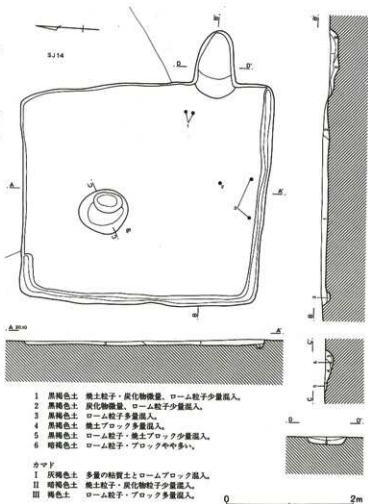
C区第60号住居跡(第442図)

K-24区に位置し、五領期の第14号住居跡を切って構築されていた。形態は方形を呈し、規模は長軸3.84m、短軸3.46m、深さは5~10cmを測る。主軸方位はS-88°-Eを示す。

床面は概ね平坦ではあるが、全体に軟弱だった。覆土は2層に分かれるが、両層ともに黒褐色土を基調とし、大きな差異はない。

カマドは東壁の南に偏した位置に設置される。壁を80cm程切り込み、袖は検出されなかった。全長は105cm、幅65cmで底面は床面から15cm程掘り込まれている。覆土は3層に分かれ第I・III層は天井部崩落土と思われる。

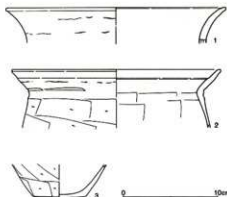
貯蔵穴、ビットは検出されなかったが、住居中央からやや北によった位置に直径80cm程の円形プランをもつ炉跡が検出された。住居に伴うもの



第442図 C区第60号住居跡



遺物出土状況



第443図 C区第49号住居跡出土遺物

と考えられるが、鉄滓等の出土もなく性格は不明である。

壁溝は深さ5～10cm程で南壁から西壁を中心に巡っていた。

出土遺物は少なく、土師器甕・壺と須恵器甕が検出されたに過ぎない。第443図1は壺、2・3は土師器甕である。甕は武蔵型甕の系譜に連なるもので口縁部は「く」の字に屈曲する。8世紀前半代、稲荷前VII期頃に位置付けられるものであろう。

C区第60号住居跡出土遺物観察表(第443図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	(23.0)	3.8		ABE	A	橙	15%	No2,3 床面
2	甕	20.8	6.1		ABCJ	A	にぶい	35%	No5 床面
3	甕		3.5	5.6	ABE	A	にぶい	35%	No7,9 床面

C区第61号住居跡(第444図)

E・F-25区に位置する。五領期の第12号住居跡を切って構築され、第62号住居跡とは壁を接する位置にある。形態は方形を呈し、規模は長軸3.84m、短軸3.20m、深さ20cmを測る。主軸方位はN-3°-Wを示す。

床面は西半が比較的堅く、第12号住居跡上面に当たる東半では軟弱であった。覆土は4層に分かれる。ロームと焼土を含む黒褐色土を基調としていた。

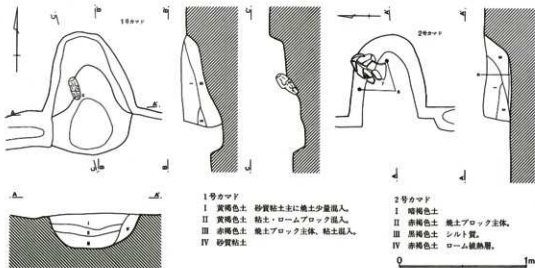
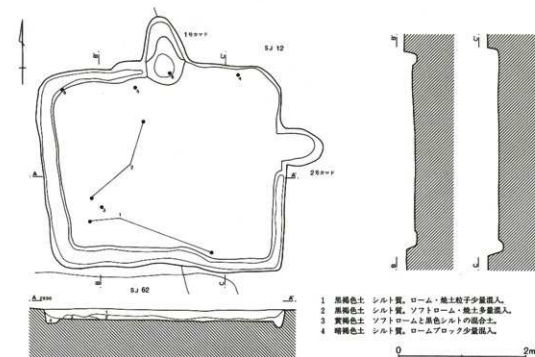
カマドは北壁と東壁の2か所に設けられていた。第1号カマドは北壁に設置され、規模は焚口から先端までの長さ90cm、上幅70cmを測る。燃焼部底面には石製支脚が遺存していた。

第2号カマドは東壁にあり、壁を55cm切り込んで構築されていた。底面はほぼフラットで床面下の掘り込みはほとんど見られない。覆土上面からは土師器甕が横倒しの状態で出土した。何れのカマドにも壁内の袖部は検出されず新旧関係は確定できないが、土器の遺存状態から見て2号カマドが新しいものと判断された。

貯蔵穴、及びピットは検出されなかった。

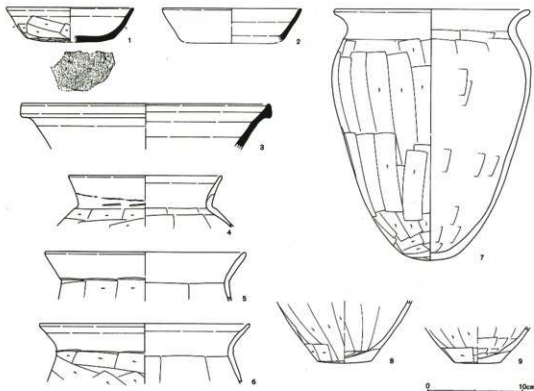
壁溝は深さ5～10cmで、両カマド間の北東コーナーを除いて巡っていた。

出土遺物には土師器と須恵器がある。土師器は甕が16点、小形甕1点、壺1点、須恵器は坏が9点、蓋5点、甕1点、長頸瓶1点が検出された(口縁部破片数)。



第444図 C区第61号住居跡・カマド

第445図 1・2は須恵器環で、前者は底部から体部にかけて手持ちへラケズリが施されている。土師器甕はいわゆる「く」の字状口縁甕(5・6)と胴部縦方向のへラケズリが施される在地系の甕(7)がある。6は胴部の張りが大きく壺(丸甕)かもしれない。7は第2号カマド上面から出土した。技法的には古い様相をもつが形態的には7世紀代の甕の典型例とは大きく異なる。遺構に伴うとすれば古墳時代の系譜を引く在地産の甕では最新のものとなろう。須恵器環と土師器甕の様相から稲荷前VII期を中心とした時期に比定されよう。



第445図 C区第61号住居跡出土遺物

C区第61号住居跡出土遺物観察表(第445図)

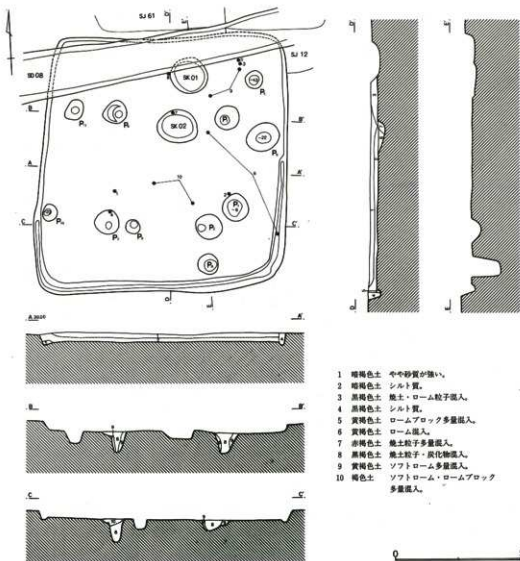
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(13.2)	3.6	(9.0)	BC	A	灰	25%	№69,97 覆土(+12~13cm)
2	坏	(14.4)	3.5		ABC	A	緑灰	30%	№33,68 覆土(+13~16cm)
3	甕	(26.0)	4.8		ABC	A	オリーブ	5%	№70 覆土(+16cm)
4	甕	(16.0)	5.4		ABE	B	橙	25%	№139 床面
5	甕	(21.0)	5.1		ABE J	B	橙	15%	№4 覆土(+4cm)
6	甕	(22.0)	6.3		ABE J	B	橙	20%	№123 覆土(+7cm)
7	甕	(20.0)	26.3		ABC	B	にがい黄	40%	カマド 胴下半煤付着 底部丸底
8	甕		6.5	(5.6)	ABE	A	にがい黄	30%	№158,159 カマド内
9	甕		3.8	4.8	ABE	B	にがい黄	40%	№2 覆土(+14cm)

C区第62号住居跡(第446図)

F-25区に位置する。重複関係は五領期の第12号住居跡を切り、第8号溝跡に北壁部を攪乱されていた。また、北側には第61号住居跡が隣接する。形態は方形を呈するものと推定され、規模は長軸4.04m、短軸3.90m、深さ15cmを測る。主軸方位はN-3°-Eを示す。

床面はほぼ平坦で、全体に堅く締まっていた。覆土は暗褐色土を基調とし、SK01付近には焼土粒子の含有が目立った。

カマドは検出されなかった。覆土中の焼土の散布状態から見て北壁に設置された可能性が高いが、第61号住居跡と第8号溝跡に破壊されたものと推定される。

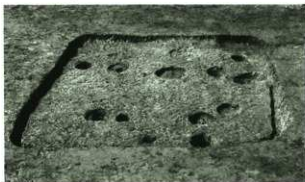


第446図 C区第62号住居跡

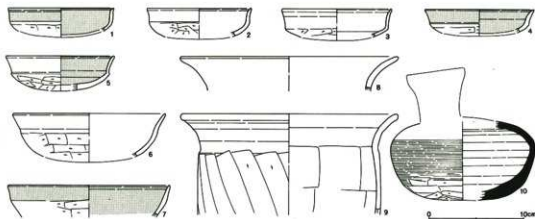
ビットは11本検出され、 $P_1 \sim P_4$ が主柱穴に相当しよう。他のビットの大半は中世の所産と推定される。土壌は2基あり、SK01はカマドに伴う掘り込みかもしれない。SK02は埋土中に焼土が多量に認められたが、性格は明らかにできなかった。

壁溝は深さ10cm程で、住居南半を中心に通っていた。

出土遺物は須恵器平瓶片を除くと全て



全景



第447図 C区第62号住居跡出土遺物

土師器で占められ、坏が10点、椀が2点、甕が8点検出された。第447図1～5は口縁部内面に沈線をもつ比企型坏系統のもので、4・5は模倣坏の影響が強い。5の内面は黒色処理されている。10は須恵器平瓶と思われる。胴部はカキ目、底部は手持ちへラケズリ調整されている。焼成は甘く、胎土に白色針状物質が少量含まれ在地産と推定される。土器様相から稲荷前IV期に比定されよう。

C区第62号住居跡出土遺物観察表(第447図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	11.0	2.5		AB	A	灰褐	5%	No62 覆土(+6cm) 赤彩
2	坏	(10.8)	3.0		AB	A	にぶい濁	10%	No32覆土(+9cm) 無彩
3	坏	(11.5)	3.0		ABC	A	浅黄橙	10%	No9 床面 無彩
4	坏	(11.4)	2.5		ABC	A	にぶい濁	10%	No65 覆土(+6cm) 赤彩
5	坏	(11.4)	3.6		ABC	B	にぶい濁	40%	No6 床面 内面黒色処理 赤彩
6	椀	(16.0)	4.5		ABC	B	にぶい難	15%	No18,41 覆土(+2~14cm)
7	椀	(17.0)	3.3		AB	A	にぶい濁	5%	No51 覆土(+4cm) 赤彩
8	甕	(22.6)	3.7		ABC	A	浅黄橙	20%	No47 床面
9	甕	(22.4)	10.5		ABC	A	にぶい難	20%	No13,40 覆土(+5~6cm)
10	平瓶		8.2		ABC	D	灰黄	30%	No35,55 床面 在地(南北企産)

C区第63号住居跡(第448・450図)

住居密集区の一角、F-24・25区に位置し、第64号住居跡と第5号竪穴状遺構(SX09)に切られている。形態は横長の長方形を呈し、規模は長軸4.68m、短軸3.74m、深さ10~15cmを測る。主軸方位はN-22°-Wを示す。

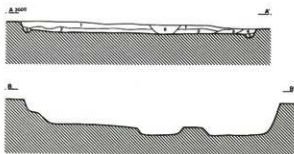
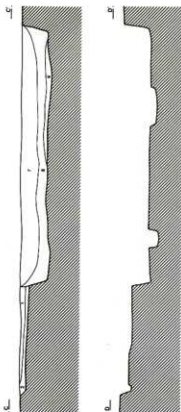
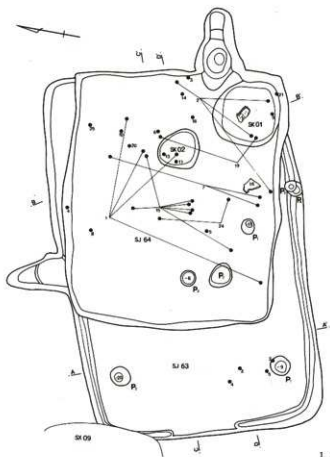
床面は堅く踏み固められているが凹凸が顕著である。覆土にはローム粒子と焼土粒子が多量に含まれ、自然堆積とは思われない。

カマドは北壁に設置されるが、袖部は第64号住居跡に破壊され詳細は不明。壁外に90cm程延び、最大幅は65cmを測る。覆土は5層に分かれ、第II層~IV層は天井部崩落土と考えられる。

ピットは4本検出されたが、支柱穴となるかどうかは明確ではない。

壁溝は深さ5cm程と浅く部分的に途切れていた。

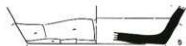
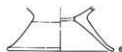
遺物は土師器と須恵器が検出された。土師器は甕が4点、台付甕1点、須恵器は坏が7点、蓋1



- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を多量、炭化粒子を混入する。しまり有り。
- 2 暗褐色土 第1層に比べローム粒子を多く、径2-3cmのロームブロックを混在する。
- 3 赤褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを混入する。
- 4 黄褐色土 ローム粒子混入。
- 5 黄褐色土 ローム粒子混入。
- 6 黄褐色土 ローム粒子・ブロックを多量混入。
- 7 黒褐色土 ロームブロック多量混入、シルト質。
- 8 黒褐色土 ロームブロック・炭化物・焼土を多量混入。
- 9 黒褐色土 焼土・炭化物を多量混入、シルト質。

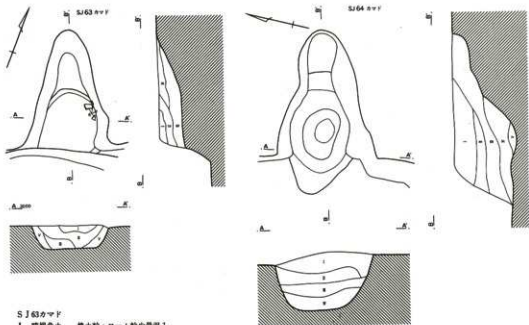
0 2m

第448図 C区第63・64号住居跡



0 10cm

第449図 C区第63号住居跡出土遺物



- S J 63カマド
- I 暗褐色土 焼土粒・ローム粒少量混入。
 - II 暗赤褐色土 焼土粒・焼土ブロック主体。ロームブロックと灰白色粘土混入。
 - III 暗赤褐色土 II層類似。焼土ブロックが極めて多い。
 - IV 黒褐色土 焼土ブロック多量混入。
 - V 暗褐色土 粘土・ロームブロックと焼土ブロック混入。

- S J 64カマド
- I 暗褐色土 焼土・ローム多量混入。
 - II 暗褐色土 焼土・炭化物・小粒ローム多量混入。
 - III 黒褐色土 焼土・ローム多量混入。シルト質。
 - IV 赤褐色土 焼熟した焼土ブロック主体。
 - V 黒褐色土 焼土粒子混入。

0 1m

第450図 C区第63・64号住居跡カマド

点と甕底部、器種不明品がある。

第449図1は一応小形の壺蓋としたが器種が良くわからない。端面に沈線が巡る小形製品である。2・3は坏で底部は再調整されている。良好な資料に欠け時期は不明確であるが、8世紀後半代(稻荷前VIII期~IX期)頃と推定される。

C区第63号住居跡出土遺物観察表(第449図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺蓋?	(10.0)	1.5		BC	A	灰	5%	覆土 器種不明確 小形製品
2	坏		1.0	8.0	ABC	B	灰白	80%	No7 床面
3	坏		1.4	(7.2)	ABC	A	灰白	30%	No4 覆土(+6cm)
4	壺	(19.0)	3.1		ABC	A	灰白	25%	No2 覆土(+5cm)
5	甕		4.0	(14.5)	ABC	A	灰	40%	No6 覆土(+6cm)
6	台付甕		4.6	(11.0)	ABE	B	にぶい	35%	覆土

C区第64号住居跡(第448・450図)

F-25区に位置し、第63・65号住居跡を切って構築される。形態は長方形を呈し、規模は長軸4.02m、短軸3.36m、深さは40cmを測る。主軸方位はN-86°-Eを示す。

床面は凹凸が比較的顕著である。覆土は3層に分かれ、ロームブロックを多量に含む黒褐色土を

基調とする。

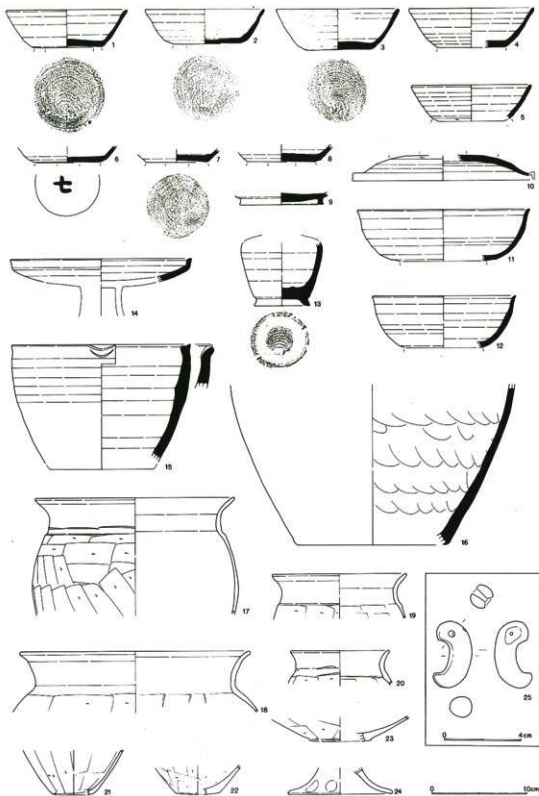
カマドは東壁に設置され、壁外に90cm突出する。燃焼部自体が壁外にあり、煙道部とは明確な段差をもって移行する。袖は検出されなかった。覆土は5層に分かれる。第II～IV層が天井部崩落土に相当しよう。第V層は灰層か。

ビットは3本検出されたが、支柱穴とはならないであろう。土壌は2基あり、SK01は南東コーナーに位置する。埋土にはロームブロックが多量に含まれ、掘り方と推定される。SK02埋土は焼土混じりの黒褐色土で、性格は不明。

出土遺物は比較的多く、土師器と須恵器がある。土師器は甕が13点、小形甕が4点、壺1点、須恵器は坏が37点、椀が3点、蓋が6点、と甕、鉢、高盤、長頸瓶が各1点出土した。第451図1～8は須恵器坏。底部調整は糸切りのままのもの(3)と周辺ヘラケズリを施すもの(1・2・4～8)があり、5は体部下端にもヘラケズリが及ぶ。口径は12cm代で、体部が直線的、及至やや丸みをもって立上がる深身のものを中心とする。6には底部に「七」の墨書が残されていた。13は、底部に高台が付される。小形の長頸瓶とすべきか。15は片口鉢。類例は比較的小さい。土師器甕は口縁部が「コ」の字状を呈する(17)。25の勾玉は混入と考えられる。瑠璃製で、頭部は片面から穿孔される。長さ3.5cm、厚さ1.1cm。須恵器坏類と土師器甕の様相から稲荷前XI期に比定される。

C区第64号住居跡出土遺物観察表(第451図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.6	3.9	7.0	ABC	A	灰	60%	No194,225 覆土(0~+20cm)
2	坏	12.4	3.6	7.1	ABC	A	灰	65%	底部「一」のヘラ記号
3	坏	12.8	4.3	6.8	ABC	A	灰	90%	No11 カマド内
4	坏	(13.0)	4.1	(7.2)	ABC	A	灰	40%	No118覆土(+10cm)
5	坏	(12.4)	3.6		ABC	A	灰	30%	No92 覆土(+30cm)
6	坏		1.7	6.8	ABC	B	灰白	80%	No211 床面
7	坏		1.4	6.5	ABC	A	灰	80%	No233,267,275 覆土(+2~6cm)
8	坏		1.8	7.2	ABC	A	灰	90%	No116 床面
9	高台坏		1.3	(8.6)	ABC	A	明緑灰	45%	No251 覆土(+7cm)
10	椀	(15.0)	5.4	(8.3)	ABC	B	灰白	15%	No4 覆土(+45cm)
11	椀	(18.0)	5.4	(9.0)	ABC	A	灰	15%	No272,P, 覆土(+4cm)
12	椀	(15.0)	5.4	(8.3)	ABC	A	灰白	20%	SK01内覆土
13	小形壺		6.6	5.8	ABC	A	灰	65%	No212 覆土(+21cm)
14	高盤	(19.0)	2.4		BC	A	灰	15%	No13 覆土(+7cm)
15	片口鉢	18.7	12.3		ABC	B	灰	50%	No158,172他 覆土(0~+36cm)
16	甕		15.8	15.6	AB	A	灰白	25%	No289 覆土(+9cm)
17	甕	(20.8)	12.2		ABEJ	A	浅黄橙	40%	カマド内
18	壺	(24.0)	6.4		ABEJ	A	橙	15%	No26 覆土(+15cm)
19	小形甕	(14.0)	4.7		ABEJ	B	にぶい	15%	No221,281 覆土(0~+26cm)
20	小形甕	10.4	3.7		ABEJ	B	にぶい	50%	No6 カマド内
21	甕		4.7	(4.3)	ABE	A	浅黄橙	15%	No294 覆土(+4cm)
22	甕		3.0	(4.6)	ABC	B	にぶい	35%	覆土
23	壺		2.6	(6.6)	ABE	A	にぶい	15%	カマド内
24	台付甕		2.8	10.8	ABE	B	浅黄橙	50%	No62,121 覆土(+20~22cm)
25	勾玉								No1 覆土(+15cm)全長3.5,最大厚1.1cm



第451图 C区第64号住居跡出土遺物

C区第65号住居跡(第453図)

F・G-25区に位置する。第64号住居跡及び第66号住居跡と重複し、前者よりも古く、後者よりも新しい。形態は方形を呈し、規模は長軸4.58m、短軸4.18m、深さは5~10cm程と非常に浅い。主軸方位はN-7°-Wを示す。

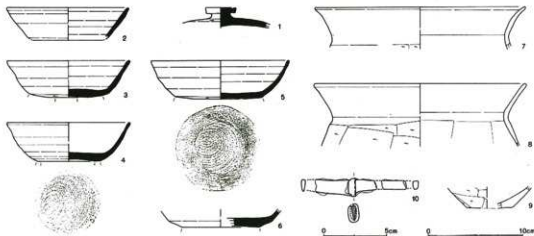
床面は一定せず、全体に東側がやや深い傾向にある。覆土は3層に分かれ、焼土とローム混じりの暗褐色土を基調に構成されていた。



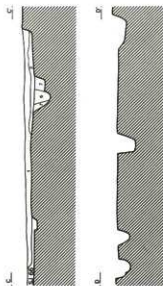
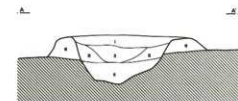
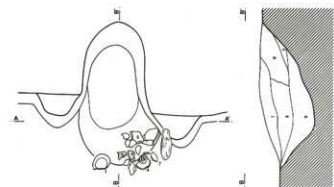
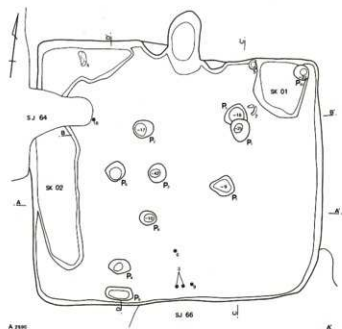
カマドは北壁中央に位置する。規模は長さ1.10m、燃焼部幅50cmを測り、底面は床面から25cm掘り凹められている。覆土は6層に分かれ、第I~IV層は天井部及び袖の崩落土、第VI層は掘り方埋土と思われる。火床面は第VI層上面と推定される。袖は砂質粘土と黒色土が混在する土で構築されるが、壁内に長く延びるものではない。

ピットは10本検出された。主柱穴は明確にできないが、P₃・P₆が相当する可能性がある。土壌は2基あり、何れも掘り方と考えられる。

遺物は土師器と須恵器、鉄器が検出された。土師器は坏が3点、甕が17点あり、前者は混入である。須恵器は坏が22点、蓋が1点、甕胴部片が5点ある。第452図1は蓋。鈕は釘頭状を呈する。2~6は坏で、底部は回転糸切り後ヘラケズリ調整されている。2~4は口径12.8cm、5は口径14.5cmを測り一回り大きい。土師器甕は口縁部が「く」の字に折れるもの(8)と弓状に外反するもの(7)がある。10は刀子で関部に鏝が遺存する。出土土器にはやや時期差が認められ、須恵器坏では5が古くⅦ期、2~4が新しくⅦ期新段階~Ⅸ期前半頃となろう。カマド前面から出土した土器を含む後者で代表させておきたい。



第452図 C区第65号住居跡出土遺物



- 1 暗褐色土 焼土・小粒ローム混入。
- 2 黒褐色土 ロームブロック多量混入。
- 3 黒褐色土 ロームブロック・焼土混入。
- 4 黒褐色土 シルト質。
- 5 黒褐色土 ロームブロック多量混入。
- 6 黒褐色土 焼土・ロームを多量に混入。
- 7 黒褐色土 ロームブロックを密に混入。

0 2m

カマド

- I 灰黄褐色土 砂質粘土主体、焼土・炭化物を少量混入。
- II 赤褐色土 焼土を主体、砂質粘土混入。
- III 黒褐色土 砂質粘土・焼土粒子混入。
- IV 赤褐色土 焼土(焼熟粘土)を主体、黒色土を少量混入。
- V 黒褐色土 シルト質。
- VI 黒褐色土 粘土・焼土・ロームブロックを密に混入、粘性強い。
- VII 灰黄褐色土 砂質粘土と黒色土の混合土。

0 1m

第453図 C区第65号住居跡・カマド

C区第65号住居跡出土遺物観察表(第452図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋		2.1		ABC	A	灰	70%	Na122, カマド内 鉦径3.0cm
2	坏	12.7	3.3		ABC	A	灰白	70%	Na99 覆土(+8cm)
3	坏	(12.8)	3.8	8.2	ABC	A	灰-灰黄	25%	Na70, 71 床面
4	坏	12.8	4.1	6.6	ABC	A	灰	60%	Na115, 116 覆土
5	坏	14.5	4.0	9.2	ABC	A	灰黄	80%	Na98 覆土(+4cm)
6	柄		1.9	(8.2)	ABC	A	青灰	25%	Na75 床面
7	甕	(22.0)	4.4		ABE	A	灰黄	10%	Na117カマド内
8	甕	(22.0)	6.5		ABE J	A	灰黄	25%	カマド内一括
9	甕		2.3	(5.2)	ABE	A	灰黄	25%	Na69 床面
10	刀子								Na101 床面 残長7.2cm

C区第66号住居跡(第454図)

F・G-25区に位置する。新旧関係は第67号住居跡を切り、第65・75号住居跡に切られていた。形態は方形を呈し、規模は長軸4.74m、短軸4.66m、深さ10~15cmを測る。主軸方位はN-8°-Eを示す。

床面は概ね平坦であるが、南東部が僅かに深い傾向にある。覆土は基本的に上下2層に分かれ、黒褐色土を基調に構成されていた。



カマドは北壁に設置されているが、第65号住居跡に一部破壊されるなど遺存状態はあまり良くない。規模は長さ1.20m、最大幅1.10mを測り、壁外に50cm程突出している。壁内の袖は崩壊しておりその痕跡を留めていなかった。覆土は4層に分かれ、第I・III層が天井部崩落土、第II層が灰層に相当するものと推定される。

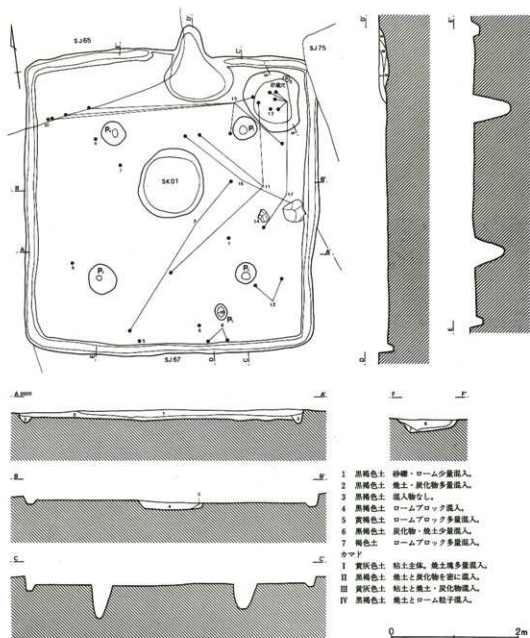
貯蔵穴はカマド脇の北東コーナーに設置されている。直径約90cmの不整円形プランを呈し、深さは20cmを測る。そのほか、住居中央部から土壌が1基検出された(SK01)。上面は貼床され、埋土はロームブロックと黒色土の混土層で構成されている。いわゆる床下土壌と推定される。

ピットは5本検出された。P₁~P₄は深さ40~60cmと非常に深く、配置も規則的であることから住居の主柱穴と考えられる。

壁溝は深さ10cm前後でカマドを除き全周する。

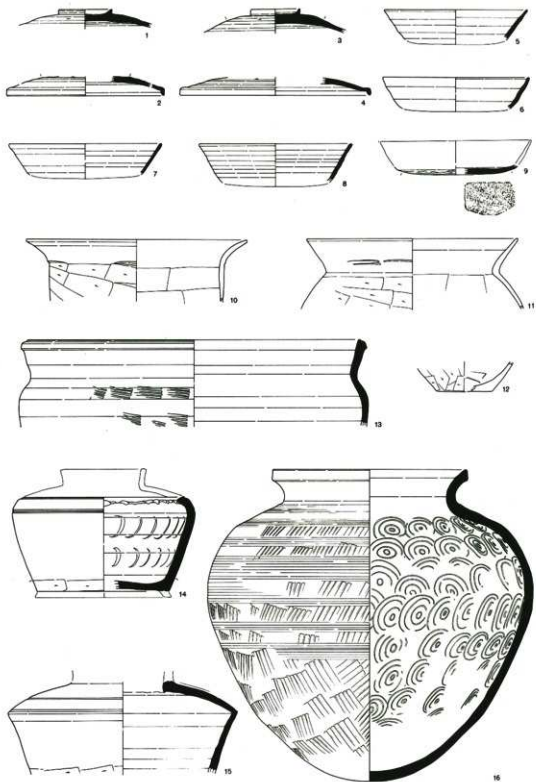
出土遺物は土師器と須恵器がある。土師器は坏が口縁部破片数で4点、甕7点、壺1点、須恵器は坏が13点、柄1点、蓋3点、甕1点、短頸壺(胴部)1点、広口壺(胴部)1点、鉢2点が検出された。土師器坏は比企型坏の細片で混入かもしれない。

第455図1~4は須恵器蓋。何れも天井部が低く、1・3は環状鈕が付される。5~9は坏。器形の判明する資料はないが、大形品で占められ、9の底部は手持ちヘラケズリが施されている。13は鉢。14は本来短頸壺と思われるが、おそらく焼成段階で口縁部が内部に落ち込んだ失敗品である。



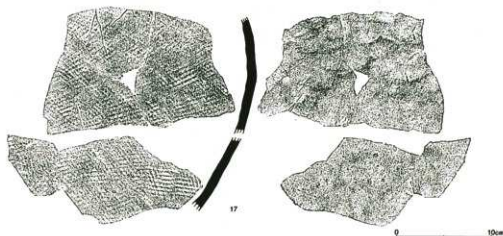
第454図 C区第66号住居跡

端部内面に二次的な打ち欠き痕が認められ、鉢として再利用されたものと考えられる。現状の口縁直下と肩部には沈線が巡り、底部には高台の外れた痕跡が残る。15は広口壺か。肩部の屈曲が鋭角的で、外面には沈線が2段巡っている。16は丸底甕。焼成が甘く全体に風化している。胴部外面は平行叩き後、中位以上にカキ目、内面は同心円状の当具痕が残る。底部は磨滅しており調整痕は不明瞭。形態及び技法に古墳時代的な様相が色濃く残るものである。土器様相から8世紀前半、稲荷前VI期が主体となろう。



0 16 10cm

第455图 C区第86号住居跡出土遺物(1)



第456図 C区第66号住居跡出土遺物(2)

C区第66号住居跡出土遺物観察表(第455・456図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋		1.9		ABC	A	灰	30%	No87 覆土(+5cm)
2	蓋	(16.4)	2.0		ABC	B	灰白	15%	No82,136 覆土(+1~6cm)
3	蓋		2.6		ABC	B	灰白	45%	No181 覆土(+8cm)
4	蓋	(20.0)	1.9		ABC	A	緑灰	15%	No3 覆土(+8cm)
5	坏	(15.0)	3.2		ABC	B	灰	20%	No134 覆土(+5cm)
6	坏	(15.3)	3.3		ABC	A	灰	10%	No144 覆土(+15cm)
7	坏	(16.0)	3.2		BC	A	青灰	20%	No7 覆土(+5cm)
8	坏	(16.0)	4.1		BC	B	灰白	35%	No147,149 床面
9	坏		0.9	(11.3)	ABC	B	灰白	10%	No10 床面 底部手持ちヘラケズリ
10	甕	(23.0)	6.5		ABE	A	にぶい	20%	No166 覆土(+8cm)
11	甕	(22.0)	7.3		ABE	A	にぶい	40%	No38 覆土(+2~5cm) 179Fit内(-17cm)
12	甕		3.2	5.9	ABE J	A	にぶい	55%	No93,156 覆土(+4~5cm)
13	鉢	(35.0)	9.1		AB	B	灰白	15%	No106 貯穴内(-16cm)
14	鉢	(17.0)	9.8	(14.0)	AB	A	灰白	35%	No183 覆土(+5cm)
15	壺		9.7		ABC	A	灰	15%	No76,79他 覆土(0~+11cm)
16	甕	(20.3)	32.6		ABC J	D	褐灰	50%	No33,184 覆土(0~+8cm)
17	甕				ABC	A	暗灰		No101,104他 貯穴内(-17~19cm)

C区第67号住居跡(第457図)

G-25・26区に位置する。第66・68号住居跡と重複し、前者よりも古いことは確実である。後者との切り合い関係は明確ではないが、本住居の方が新しいものと判断された。また、南西コーナーは第6号溝跡に破壊されていた。形態は方形を呈し、規模は長軸5.20m、短軸5.10m、深さ20cmを測る。主軸方位はN-78°-Eを示す。

床面は若干高低差をもち一定しない。覆土は6層に分かれる。第1層にはロームブロックが多量に含まれ人為的な埋め戻しかもしれない。第4・5層は壁体の崩壊土と思われる。

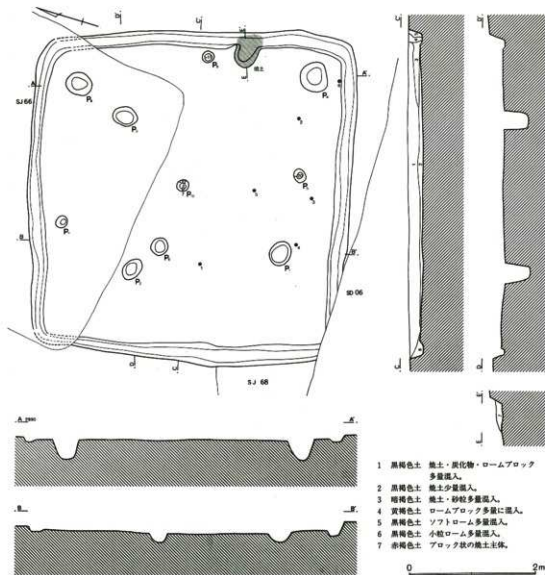
カマドは明確に検出されなかった。東壁の中央から南に寄った位置の壁際にブロック状の焼土が堆積した浅い掘り込みが検出され、おそらくこの部分にカマドが設置されたものと推定される。壁

外の掘り込みは認められなかった。

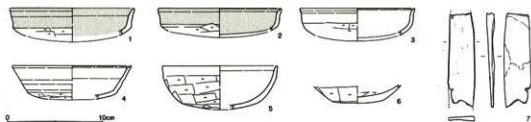
ピットは10本検出され、 P_2 ・ P_3 が主柱穴となる可能性が高いが、4本主柱穴配置とすると対応する2本の柱穴は確認されなかった。

壁溝は深さ5cmで残存部は全周する。

出土遺物は土師器と砥石がある。土師器は坏が8点、椀が2点、甕が7点、台付甕が2点、鉢が3点検出された。坏は比企型坏が4点、模倣坏系比企型坏が1点、模倣坏1点、有段口縁坏2点に分かれる。第458図1・2は比企型坏、3は模倣坏か。4は有段口縁坏である。7は砥石で、極めて薄い。残長9.8cm、重量10g。土器は全て破片で良好な資料に乏しいが、土師器坏の様相から稲荷前II期を中心とした時期と思われる。



第457図 C区第87号住居跡



第458図 C区第67号住居跡出土遺物

C区第67号住居跡出土遺物観察表(第458図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.0)	2.9		ABC	A	にぶい	10%	Na24 覆土(+10cm) 赤彩
2	坏	(12.8)	2.4		ABC	A	にぶい	10%	Na90 覆土(+9cm) 赤彩
3	坏	(13.0)	2.9		ABC	A	にぶい	10%	Na101 床面 無彩
4	坏	(12.4)	3.5		ABE	B	橙	15%	Na121 覆土(+7cm) 全体に風化
5	坏	(12.0)	4.6		ABE	B	橙	25%	Na50 覆土(+8cm)
6	壺		1.8	5.5	ABE J	A	灰黄褐	5%	Na117 覆土(+5cm)
7	砥石								Na123 床面 残長9.8cm 重量10g

C区第68号住居跡(第459・460図)

G・H-25区に位置する。第67号住居跡に北東コーナー上面を切られ、第6・16号溝跡に住居を寸断されていたほか、ビット群の攪乱を受け遺存状態は極めて悪い。形態は方形を呈し、規模は長軸6.54m、短軸5.90mと比較的大形の部類に属する。深さは10~20cmを測る。西カマドをもつ住居跡で主軸方位はS-78°-Wを示す。

床面は概ね平坦である。覆土は4層に分かれる。ロームブロックを多量に含む黒褐色土を基調としており、人為的な埋め戻しの可能性もある。

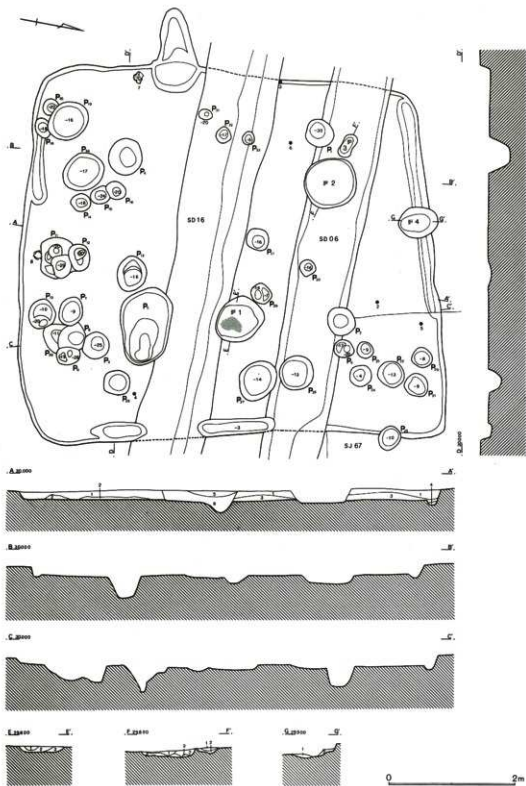
カマドは西壁に位置する。規模は全長1.30m、幅75cmを測り、燃焼部はほぼ壁内にあり、床面から10cm掘り凹められている。煙道部はフラットで壁外に約80cm延びる。袖部は検出されなかった。覆土は7層に分かれるが、全て天井部崩落土と思われ、明確な灰層は認められない。

住居内には炉跡状の浅い土壌が4基検出された。何れも住居北半にあり、第2・3号炉は第6号溝下面から検出された。第4号炉は壁に掛かって設置され、炉というよりもカマドの痕跡である可能性も否定できない。1~3号炉については上面に焼土層が形成され堆積状況も近似しているが、性格は明らかにできなかった。

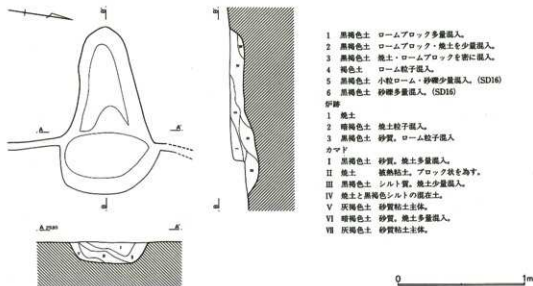
ビットは30本余り検出されている。埋土の状況から大半は中世以降の所産と推定される。P₁~P₄については比較的規則的に配置され、住居に伴う主柱穴と考えられる。

壁溝は深さ5cm程と浅く、部分的に検出された。

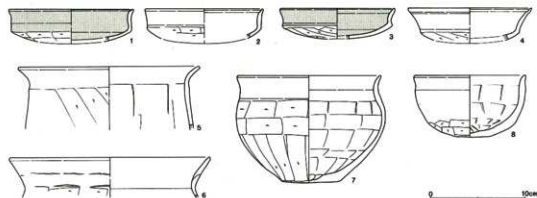
出土遺物は土師器と須恵器がある。土師器は坏が38点、碗2点、皿2点、甕9点、壺1点、鉢1点が出検され(口縁部破片数)、坏の構成比が高い。坏の内訳は比企型坏が24点、模倣坏系比企型坏が11点、模倣坏が1点、比企型坏か模倣坏系のそれか不明のものが2点となる。須恵器は坏が3点と甕が5点出土したが何れも混入である。



第459图 C区第68号住居跡



第460図 C区第68号住居跡カマド



第461図 C区第68号住居跡出土遺物

第461図1～4は比企型環。後2者は模倣環系である。4は皿とした方がよいかもしい。6の裏は混入と目される。7は鉢である。火にかけて使用されたものと思われ、外面は強く二次被熱を受けている。土師器環類から見る限り、稲荷前II期頃の土器様相と推定される。

C区第68号住居跡出土遺物観察表(第461図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	(13.0)	3.4		ABC	A	によう色	40%	覆土 赤彩
2	環	(12.4)	3.1		AB	B	灰褐色	10%	No61 覆土(+17cm) 無彩
3	環	(12.0)	3.2		ABC	A	橙	20%	No7 覆土(+8cm) 赤彩
4	皿	(13.0)	3.4		ABC	B	によう色	15%	No164 覆土(+8cm)
5	甕	(19.0)	6.6		ABC	C	によう色	10%	No50 覆土(+12cm) やや風化
6	甕	(21.0)	3.2		ABE	A	によう色	20%	No11 床面 混入か
7	鉢	15.0	11.2	6.1	ABC	A	によう色	70%	No100 床面 外面二次被熱
8	鉢	11.6	6.5		ABC	B	橙	80%	No188 床面

C区第69号住居跡(第462図)

G・H-25・26区に位置する。第70号住居跡、第5号井戸跡及び第16号溝跡の擾乱を受け、遺存状態は良くない。また、西壁部上面には第87号住居跡カマドが乗っていた。形態は方形を呈するものと推定され、残存規模は長軸3.74m、短軸3.00m、深さ15~20cmを測る。主軸方位はN-15'-Eを示す。

床面は概ね平坦である。覆土は焼土・ロームを多量に含む黒褐色土で構成されていた。

カマドは検出されなかった。ピットは4本検出されたが、その全てが住居に伴う主柱穴とはならないであろう。壁溝は深さ5~10cm程で、北壁中央部を除き巡っていた。

出土遺物は極めて少なく土師器坏小片が2点と甕胴部片が検出されたのみで時期は確定できない。重複する第70号住居跡との切り合い関係から稲荷前II期またはそれ以前となる。古墳時代前期の住居跡ではないかという疑いもあるが、特定するだけの根拠は得られなかった。

C区第70号住居跡(第462図)

G・H-25・26区に位置する。第69号住居跡を切り、北壁上面には第87号住居跡カマドが掘り込まれていた。形態は縦に非常に長い長方形を呈し、規模は長軸6.14m、短軸3.66m、深さ25~30cmを測る。主軸方位はN-62'-Eを示す。

床面は概ね平坦であるが、中央に向かって僅かに深くなっている。覆土は暗褐色土を基調とし、ロームと焼土の混入が目立った。

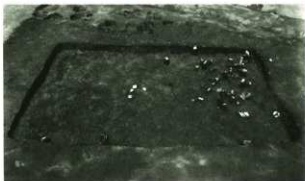
カマドは東壁に位置する。規模は長さ1.20m、幅65cmで、壁外に60cm延びている。底面はフラットで床面との段差は少ない。袖は灰褐色粘土を主に構築されていた。

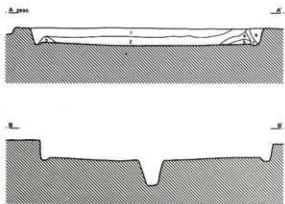
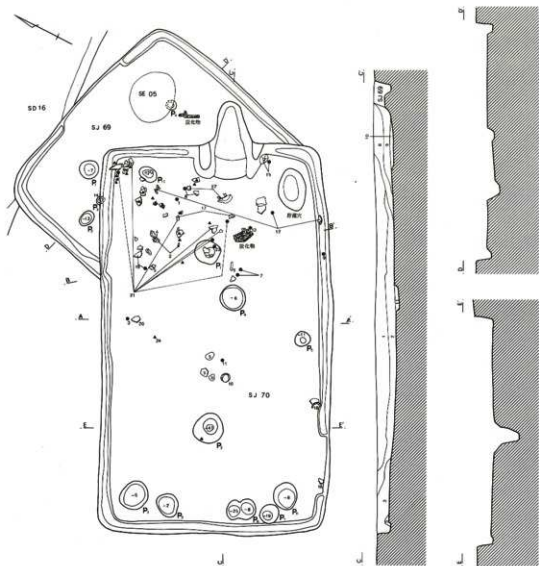
貯蔵穴はカマド脇の南東コーナーに設置されている。形態は楕円形で、規模は長径62cm、短径45cm、深さは13cmを測る。

ピットは10本検出され、P₁とP₂の2本によって主柱穴が構成されるものと考えられる。P₁は柱穴とはならない。その他のピットは後世の所産と推定される。

壁溝は深さ5cm程で、南壁部で一部途切れる他は全周する。

出土遺物は多く、住居東半のカマド前面付近に集中する傾向にある。土師器と須恵器が検出され、土師器は坏が26点、甕が5点、壺が2点、小形甕・鉢・高坏が各1点出土した(口縁部破片数)。土師

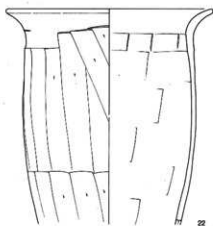
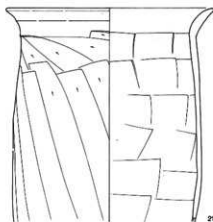
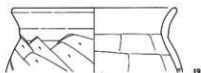
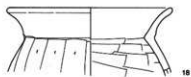
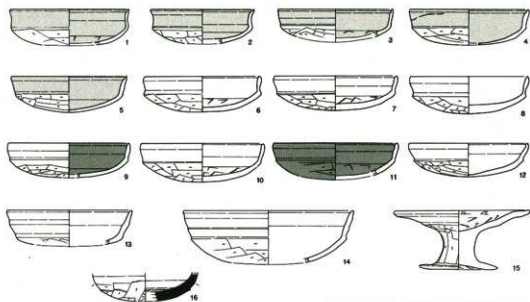




- 1 暗褐色土 ローム・焼土混入。砂質。
- 2 暗褐色土 ローム・焼土・炭化物多量混入。
- 3 暗褐色土 炭化物・焼土多量混入。
- 4 暗褐色土 焼土粒子多量混入。
- 5 暗褐色土 ロームブロック主体。
- 6 黄褐色土 ロームを多量混入。
- 7 褐色土 ローム小ブロック少量混入。
- 8 灰褐色土 砂質粘土主体。焼土混入。
- 9 赤褐色土 焼土主体。砂質粘土混入。
- 10 黒褐色土 焼土・炭化物混入。
- 11 黄褐色土 ロームブロック多量混入。

0 2m

第462図 C区第69・70号住居跡

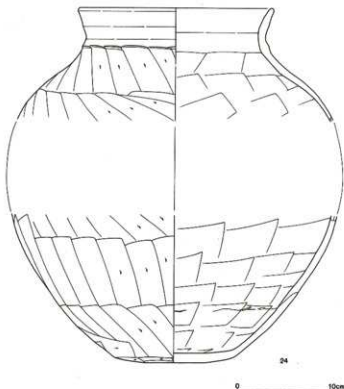


0 10cm

第463图 C区第70号住居跡出土遺物(1)

器坏は比企型坏が9点、模倣坏系比企型坏が6点、模倣坏が9点、有段口縁坏が2点という比率を示し、模倣坏の構成比が高い点は本遺跡の中でも異質である。須恵器は6点出土したが、5点は8世紀代の混入資料である。

第463図1・2は比企型坏、3～5は模倣坏系の比企型坏である。口径は2が最小で10.7cm、他は12cm代である。6～12は須恵器坏蓋模倣の坏か。全体に器内が厚くぼったりした作りで、明らかに黒色処理されたものが認められる(9・11)。口縁部は直立するもの(6)と外傾するもの(7～12)に分かれるが、何れも端部は内湾気味におさめている。



第464図 C区第70号住居跡出土遺物(2)

13・14は有段口縁坏と思われ、後者は推定口径17.8cmと非常に大形である。16は須恵器壺類の底部で、粗い手持ちヘラケズリが施されている。焼成は良好で産地は不明。17は鉢か。外面は二次被熱して器壁は脆弱。18～23は甕。頸部が強く捻れ、胴部が膨らむであろう18・19は古い様相が窺われ、混入と見た方が良くもしいない。24(第464図)は壺で胴部を欠く。土器様相から稲荷前II期に比定しておきたい。

C区第70号住居跡出土遺物観察表(第463・464図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.4)	3.7		ABC	A	浅黄橙	15%	No200 覆土(+10cm) 赤彩
2	坏	(10.7)	3.6		ABC	A	いよ青	45%	No176,184 床面 赤彩
3	坏	(12.0)	2.9		ABC	A	灰褐	15%	No42 覆土(+17cm) 赤彩
4	坏	12.5	3.7		ABC	B	橙	40%	No175 覆土(+5cm) 赤彩
5	坏	(12.0)	3.8		ABC	A	いよ青	25%	No170 覆土(+8cm) 赤彩
6	坏	12.0	3.7		ABC	B	いよ青	45%	覆土
7	坏	12.8	3.6		ABC	B	橙	75%	No100,102,195 床面
8	坏	12.2	3.9		ABC	B	いよ青	70%	No201,203 覆土(+7~20cm)
9	坏	12.6	3.6		ABC	A	いよ青	25%	No129 覆土(+8cm) 内面黒色処理
10	坏	12.8	4.0		ABC	B	橙	10%	No188 床面
11	坏	(13.0)	3.4		BC	B	黒褐	10%	No70 覆土床面 黒色処理
12	坏	(12.4)	3.5		ABC	B	橙	80%	No192,211 覆土(0~+20cm)
13	坏	(13.0)	3.6		ABC	B	灰褐	5%	No128 覆土(+19cm) 風化

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	地成	色調	残存	出土位置・その他
14	大形坏	(17.8)	5.4		ABC	A	橙	15%	覆土
15	高 坏	14.1	6.2	8.2	ABC	A	にぶ黄	85%	No.137,212 床面 器形歪む
16	小形甕		3.0		AB	A	暗青灰	40%	No.213 覆土(+16cm)
17	鉢	(18.0)	10.0		ABC	A	浅黄橙	25%	No.182,206 覆土(+15~18cm)
18	甕	(17.0)	7.1		ABC	A	にぶ黄	25%	No.214 覆土(+8cm)
19	甕	(17.9)	6.8		ABC	A	浅黄	25%	No.47,171 覆土(+12~14cm)
20	甕	(18.0)	10.0		ABC	A	浅黄橙	15%	No.169 覆土(+16cm)
21	甕	21.4	22.4		ABC J	B	にぶ黄	60%	No.84,127他 覆土(+4~21cm)
22	甕	(21.4)	22.5		ABC	B	浅黄	35%	No.201,209 覆土(+1~7cm)
23	甕		4.8	6.0	ABC	A	浅黄橙	25%	No.91 覆土(+8cm)
24	壺	(20.0)	37.0		ABC	A	浅黄橙	40%	No.77,178他 覆土(0~+25cm)

C区第71号住居跡(第465・466区)

調査区北東寄りのE-26・27区に位置し、第9・10号方形周溝墓の周溝を切って構築されていた。また、住居内には第7号掘立柱建物跡が重複し、出土遺物から住居の方が古いものと推定される。形態は方形を呈し、規模は長軸6.08m、短軸6.06m、深さ30cmと比較的大形である。主軸方位はN-59°-Eを示す。



床面は概ね平坦で全体的に堅く締まっていた。覆土はロームを極めて多量に含む黒褐色土を基調としていた。

カマドは東壁の中央に位置する。先端は第10号方形周溝墓周溝上に掛かる。覆土は7層に分かれ、第I・II・IV~VI層が天井部崩落土に相当しよう。III層は流入土か。袖は灰褐色粘土を主体に構築されていたが、遺存状態はあまり良くない。

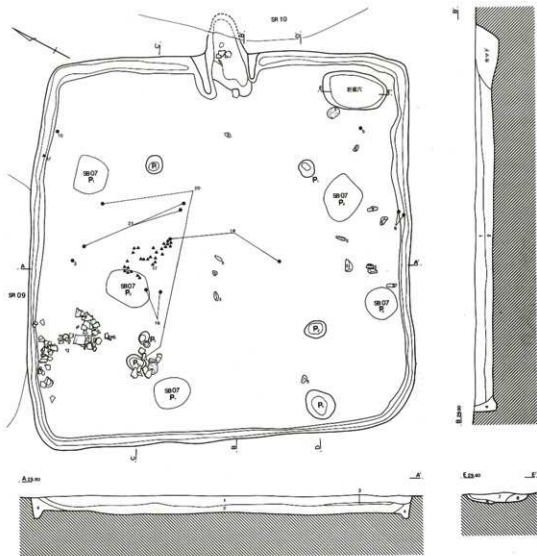
貯蔵穴は南東コーナーに設置されている。楕円形プランを呈し、規模は長径100cm、短径60cm、深さ15cmを測る。埋土には焼土と炭化物が多量に含まれていた。

ピットは6本検出され、P₁~P₄が4本主柱穴に相当するものと考えられる。P₅の帰属は不明である。

壁溝は深さ平均10cm程度でカマドを除き全周する。

出土遺物は住居北西部から比較的多く検出されたが、そのほとんどは床面よりも数cm浮いた状態で、埋没過程で流入、或いは投棄されたものと推定される。

出土遺物には土師器と須恵器がある。土師器は坏が29点、甕が12点、小形甕が2点、甌が1点、壺が4点出土した(口縁部破片数)。須恵器は甕が口縁部片1点と胴部片1点、コップ形土器が1点出土したが、後者は明らかな混入である。土師器坏の中では、模倣坏系の比企型坏が13点、口縁下に腰をもつ、一応比企型坏の系譜下にあると思われるもの10点、有段口縁坏2点、模倣坏1点、その他及び不明3点という割合を示す。

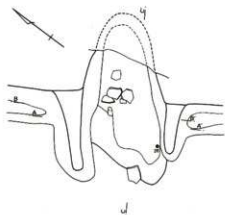
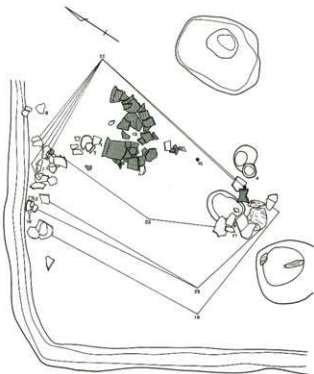
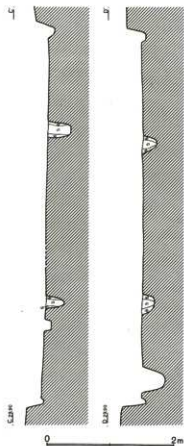


- | | |
|----------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色土 ソフトローム多量混入。シルト質。 | 6 黄褐色土 ソフトローム多量に混入。(掘方掘土) |
| 2 黒褐色土 ローム小ブロックを多量に密に混入。 | 7 黒褐色土 塵土粒子を密に多量に混入。 |
| 3 黒褐色土 ソフトロームを多量に混入。 | 8 黒褐色土 塵土粒子と炭化物粒子を多量に混入。 |
| 4 黒褐色土 ソフトローム・ロームブロック多量混入。 | |
| 5 黒褐色土 ローム少量混入。(柱痕) | |

0 2m

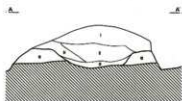
第465図 C区第71号住居跡(1)

第467図1～10は土師器環で、口径は10～11cm代の小振りの製品が主体となる。4は比企型環本来の形状を保っている。10は有段口縁環である。11～17は甕。13を見ると高さ40cm程の長胴の器形となろう。第468図23は須恵器甕。在地産で焼成は非常に甘い。25は須恵器甕胴部片で、破損面にも自然釉が付着していることから、窯体の焼台として使用されたものが何らかの理由でもたらされたものと推定される。26は滑石製の白玉。直径1.2cm、厚さ0.7cmで覆土から出土した。出土土器は稲荷前中期のものを含むが、主体はIV期に位置付けられるものとする。



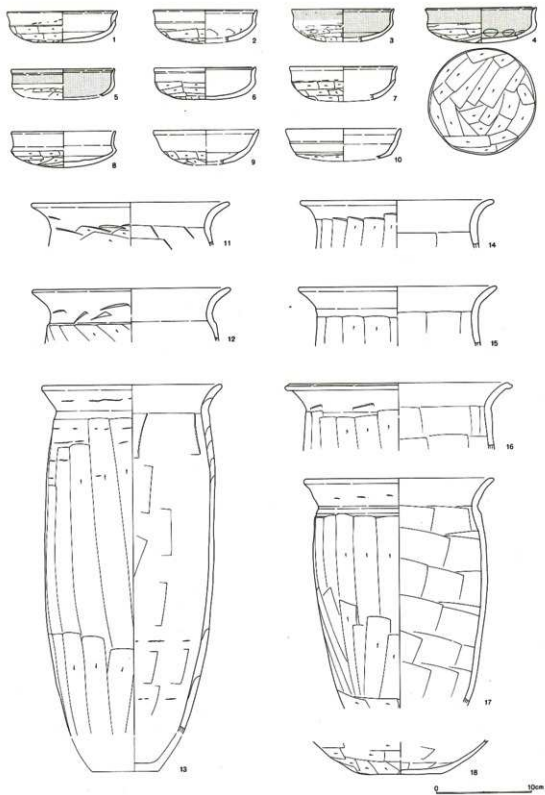
カマド

- I 暗褐色土 焼土・砂質粘土少量混入。
- II 暗褐色土 シルト質、焼土・砂質粘土多量混入。
- III 黄褐色土 ソフトローム・灰質褐色シルト混入。
- IV 暗褐色土 砂質粘土・焼土多量混入。
- V 暗褐色土 焼土・粘土・ロームブロック混入。
- VI 暗褐色土 大粒の焼土ブロック多量混入。
- VII 灰褐色土 砂質粘土主体、ロームブロック混入。

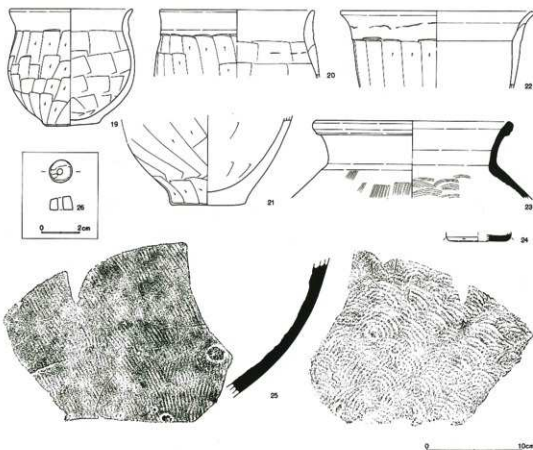


0 1m

第466図 C区第71号住居跡(2)・カマド



第467图 C区第71号住居跡出土遺物(1)



第468図 C区第71号住居跡出土遺物(2)

C区第71号住居跡出土遺物観察表(第467・468図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	構成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.5)	3.3		ABC	B	にぶい	25%	No265 覆土(+11cm) 無彩
2	坏	10.8	3.5		ABC	B	にぶい	75%	No267 覆土(+11cm) 無彩 内面風化
3	坏	(10.7)	3.4		ABC	A	にぶい	45%	No37,204 床面 赤彩
4	坏	11.6	3.7		ABC	A	にぶい	95%	No306 覆土(+5cm) 赤彩
5	坏	(10.8)	2.9		ABC	B	にぶい	20%	No36 覆土(+7cm) 赤彩
6	坏	10.7	3.4		AB	A	にぶい	50%	No300 覆土(+8cm) 無彩
7	坏	(11.2)	3.5		ABC	B	橙	30%	No251 覆土(+11cm)
8	坏	(10.8)	3.8		ABC	A	にぶい	40%	No296 覆土(+11cm) 無彩
9	坏	(11.0)	3.6		ABE	A	橙	25%	No30,31 床面 無彩
10	坏	(12.0)	3.1		ABE	B	にぶい	15%	No189 覆土(+7cm) 無彩
11	甕	(20.4)	4.6		ABC J	A	灰黄	15%	No302 覆土(+9cm)
12	甕	(20.5)	5.6		ABC J	C	浅黄橙	20%	No246 覆土(+11cm)
13	甕	18.6	36.7		ABC	B	にぶい	90%	No260,291他 覆土(+4~14cm)
14	甕	20.0	5.0		ABC J	B	淡黄	25%	No87,215 覆土(+2~9cm)
15	甕	(20.6)	6.2		ABC J	B	淡黄	15%	覆土(+4cm) 全体に風化
16	甕	(23.0)	7.0		ABC J	A	にぶい	25%	No93,317 覆土(+5~6cm)
17	甕	19.5	24.0		ABC J	B	灰黄褐	85%	No150,160他 覆土(+2~14cm)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
18	壺		3.4	8.4	ABC	A	灰黄褐	30%	No244,245 覆土(+11cm)
19	小形甕	12.7	12.3	5.8	ABC	A	にぶい橙	75%	No242,298 覆土(+4~13cm)
20	小形甕	(16.0)	7.1		ABC J	B	浅黄橙	30%	No180,297 覆土(+3~5cm)
21	甕		9.4	8.0	ABC	A	淡黄	60%	No176~178 覆土(+8~20cm)
22	甕	20.0	8.0		ABC J	B	浅黄橙	50%	No255,305他 覆土(+3~13cm)
23	甕	(20.2)	8.1		ABC	D	にぶい橙	40%	No301,309 覆土(0~+11cm)
24	コップ形		1.0	(6.0)	BC	A	暗青灰	20%	覆土
25	甕				AB	A	暗灰		No243,247,304 覆土(+2~14cm)
26	白玉								No322 カマド内 径1.2cm 厚さ0.7cm

C区第72号住居跡(第469・470図)

E・F-26区に位置する。住居南東コーナーには第73号住居跡を僅かに切り、西壁部は第93号土壌に切られていた。形態は方形を呈し、規模は長軸3.62m、短軸3.36m、深さ20cmを測る。主軸方位はN-2°-Eを示す。



床面は平坦である。覆土は4層に分かれ、ローム混じりの黒褐色土を基調とする。

カマドは北壁の中央から西に寄った位置に設けられていた。規模は長さ1.10m、幅70cmで、燃焼部底面は床面から8cm程掘り凹められフラットである。燃焼部奥壁は急角度で立ち上がり短い煙道部に移行する。覆土は8層に分かれ、天井部及び袖の崩落土で構成されるようである。火床面は掘り方底面か。

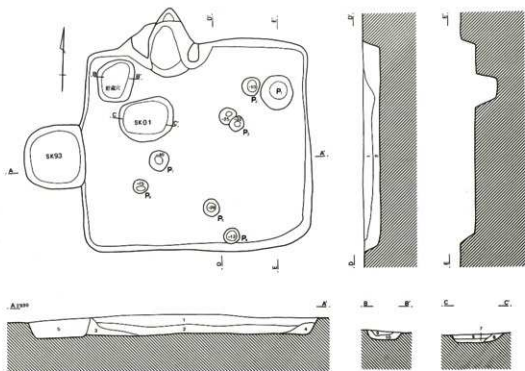
貯蔵穴はカマド脇の北西コーナー内側に設置されている。深さ10cm余りで上層には焼土が多量に含まれていた。

ピットは7本検出されたが、住居に伴う柱穴は明らかにできなかった。その他土壌が1基貯蔵穴南側から検出された(SK01)。上面に貼床が認められず住居に伴う可能性があるものの性格は不明である。

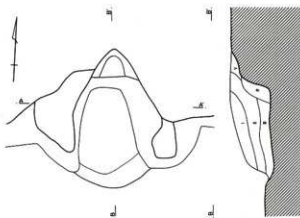
出土遺物は比較的多い。その大半は床面から浮いた状態で出土しており、埋没過程の流入または投棄品と考えられる。種類としては土師器と須恵器がある。土師器は坏が9点、甕11点、小形甕2点、須恵器は坏が34点、以下蓋5点、甕2点、磨鉢1点、鉢1点、壺・瓶類が4点検出された。

第471図5・6は土師器坏。前者は北武蔵型坏に形態は類似するが在地産。後者は形態上、典型的とはいえないが北武蔵型坏と思われる。

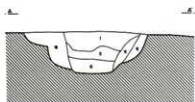
7~21は須恵器坏類である。一見して判るようになり法量差のある土器群で構成され、口径15cmを測る18を最大に、14cm代の16・17、13cm前後の9~15、12cm~11cm代まで縮小した7・8まで含んでいる。底部は糸切り後再調整されるものかほとんどであるが、小振りの7・8は底部回転糸切り後無調整である。高台坏は口径15.8cmと大振りで高台の作りもしっかりしている(19)。



0 2m



- 1 黒褐色土 シルト質。小粒ローム少量混入。
- 2 黒褐色土 シルト質。大粒ローム少量混入。
- 3 黒褐色土 シルト質。焼土・ローム混入。
- 4 黒褐色土 シルト質。ロームブロック多量混入。
- 5 黒褐色土 シルト質。
- 6 暗褐色土 焼土多量混入。
- 7 暗褐色土 砂質。
- 8 暗黄褐色土 シルト質。
- 9 暗褐色土 焼土多量混入。
- 10 暗褐色土 ロームブロック多量混入。

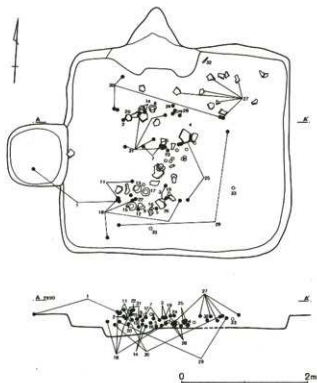


0 1m

カマド

- I 黄灰褐色土 砂質粘土主体。焼土少量混入。
- II 黄灰褐色土 砂質粘土主体。焼土・炭化物を多量混入。
- III 黄灰褐色土 砂質粘土主体。焼土・炭化物を混入。
- IV 暗黄褐色土 砂質粘土主にローム多量混入。
- V 暗黄褐色土 砂質粘土主に焼土粒子少量混入。
- VI 黄灰褐色土 砂質粘土。焼土少量、ローム多量混入。
- VII 黄灰褐色土 砂質粘土主に焼土を多量に混入。
- VIII 黄灰褐色土 砂質粘土とロームブロック混在。

第469図 C区第72号住居跡・カマド



第470図 C区第72号住居跡遺物分布図



とかなり離れた覆土の破片が接合しており、確実に伴うとは言い切れない。21は底部破片であり、良好な資料とはいえない。

土器群は稲荷前Ⅶ期～Ⅷ期のものが主体を占められるが、7・8はⅩ期またはそれ以降以降

C区第72号住居跡出土遺物観察表(第471～473図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋		3.3		ABC	A	灰	60%	No29,176 覆土(+17～24cm)
2	蓋	(19.4)	2.0		ABC	A	灰	10%	No2 覆土(+17cm)
3	蓋	19.0	2.4		ABC	A	灰	40%	No112,222,223 覆土(+15～23cm)
4	蓋	(20.0)	1.6		ABC	B	灰黄	15%	No76 覆土(+9cm)

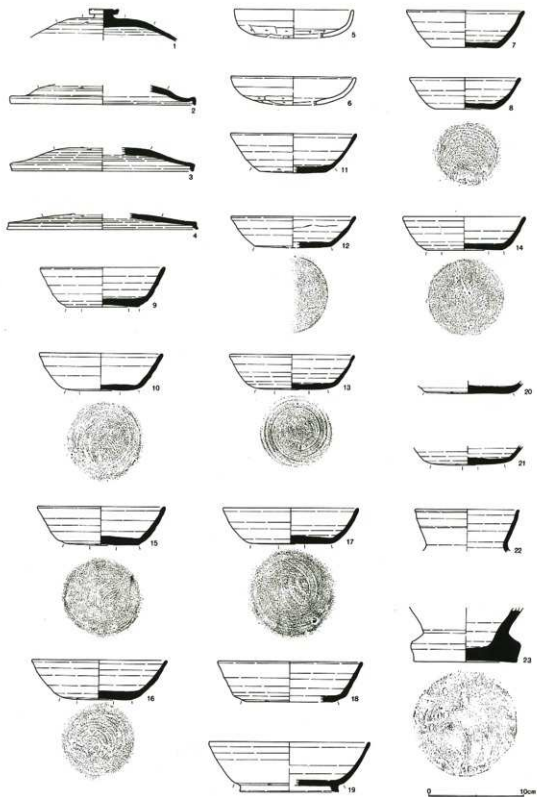
蓋には器形の判明する資料はない(1～4)。1は釘頭状の鈕が付される。23は磨鉢底部。端部の突出は比較的高いがややだれ気味で、底部は回転糸切りのままである。

第472図27は古墳時代からの系譜を引く丸底甕。10数点の同一個体と思われる破片があるが接合率は低く、図上復元したが器形は本来と異なるかもしれない。口縁部は短く外反し、頸部に5本組の横波状文が巡る。胴部外面は格子叩きで、一部の破片には横走沈線が施されている。内面は同心円状の当具痕の上から軽いナデが加えられる。

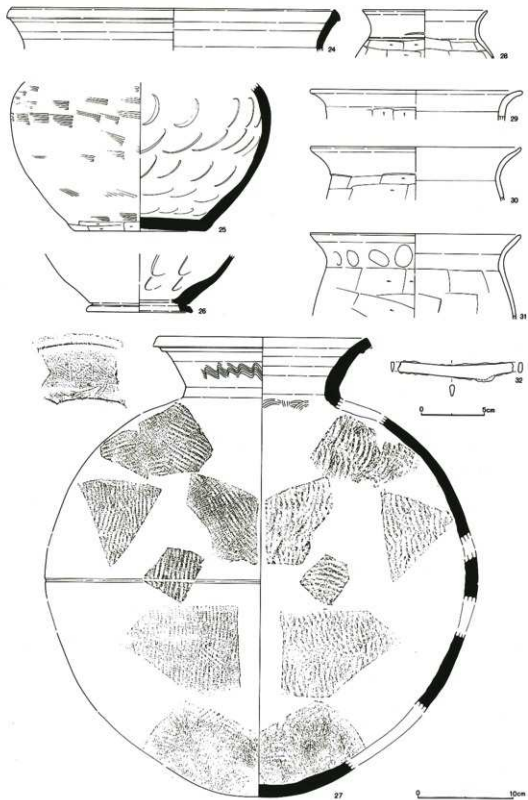
32は刀子。平棟で刃関が付くと思われるが錆に覆われ不鮮明である。残長9.1cm。

須恵器環類の法量差に現れているように全体に時期差のある土器群で構成されている。おそらく住居廃絶後一定期間にわたって土器捨て場的に機能したのかもしれない。

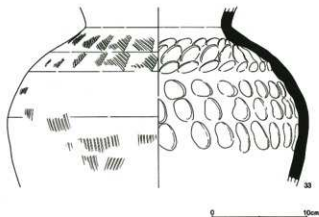
時期決定は難しい。カマド内から出土したものを取り上げると18と21の環がある。前者はカマド内



第471图 C区第72号住居跡出土遺物(1)



第472图 C区第72号住居跡出土遺物(2)



第473図 C区第72号住居跡出土遺物(3)

るものと思われる。逆に27の甕は鳩山窯跡群で生産される甕には類例は見いだせず、生産年代はそれ以前に遡る可能性があろう。ここではおおまかに稻荷前VII期～VIII期にかけて使用から埋没したものと捉えておきたい。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	施成	色調	残存	出土位置・その他
5	坏	12.4	2.9		ABC	A	にぶい	15%	No246 床面 無彩
6	坏	(13.0)	2.9		ABE	A	にぶい	25%	カマド内覆土 北武藏系
7	坏	(12.2)	3.9	7.1	ABC	C	灰黄	30%	No16,18 覆土(+13cm)
8	坏	(11.5)	3.3	6.4	ABC	A	緑灰	70%	No217 覆土(+15cm)
9	坏	(13.0)	4.1	7.6	ABC	A	青灰	40%	No52 覆土(+18cm)
10	坏	12.8	3.9	7.5	ABC	A	灰	60%	No229,236他 覆土(+7~10cm)
11	坏	(13.1)	3.9	7.1	ABC	A	灰白	25%	No26,228 覆土(+12~26cm)
12	坏	(12.8)	3.3	(8.1)	ABC	A	緑灰	45%	No51 覆土(+28cm)
13	坏	(13.0)	3.6	7.5	ABC	A	灰	40%	No41 覆土(+14cm)
14	坏	12.7	3.5	8.0	ABC	A	緑灰	95%	No216,258 覆土(+5~6cm)
15	坏	13.2	4.0	7.9	ABC	A	灰	55%	No53 覆土(+21cm)
16	坏	14.0	4.2	7.5	ABC	B	灰	25%	No245 覆土(+6cm)
17	坏	14.1	3.8	8.4	ABC	C	灰白	80%	No219 覆土(+19cm)
18	坏	15.0	4.2	10.0	ABC	B	灰	40%	No24,70他 覆土(+7~27cm)+カマド内
19	高台坏	(15.8)	5.2	(10.3)	ABC	A	灰	30%	No187,234 覆土(+18cm)
20	坏		1.4	8.5	ABC	A	灰	10%	No7 覆土(+9cm)
21	坏		2.0	7.6	ABC	A	灰白	80%	カマド覆土
22	壺	(10.7)	4.4		A	A	青灰	20%	No24 覆土上層
23	磨鉢		5.7	10.8	ABC	A	灰	80%	No279 覆土(+6cm)
24	短頸壺	(34.0)	4.4		AB	B	灰白	5%	No152 覆土(+17cm)
25	壺		17.5	13.8	ABC	A	緑灰	45%	No243,251,253 覆土(+1~7cm)
26	壺		6.1	(11.0)	ABC	A	灰	20%	No230 床面
27	甕	22.0	48.0		ABC	A	灰	10%	No254,267他 覆土(+2~19cm)
28	小形甕	13.0	5.0		ABE	A	にぶい	75%	No149,151,199 覆土(+5~7cm)
29	甕	(22.0)	3.1		ABFJ	A	にぶい	10%	No69,130 覆土(+8~15cm)
30	甕	(22.0)	5.6		AB	C	にぶい	15%	No108,143,150 覆土(+4~30cm)
31	甕	(22.0)	8.8		ABEJ	A	にぶい	15%	No14,250,259 覆土(+2~25cm)
32	刀子								No206 覆土(+11cm) 残長9.1cm
33	甕		18.7		ABC	A	灰	40%	No62,210他 覆土(+4~23cm)

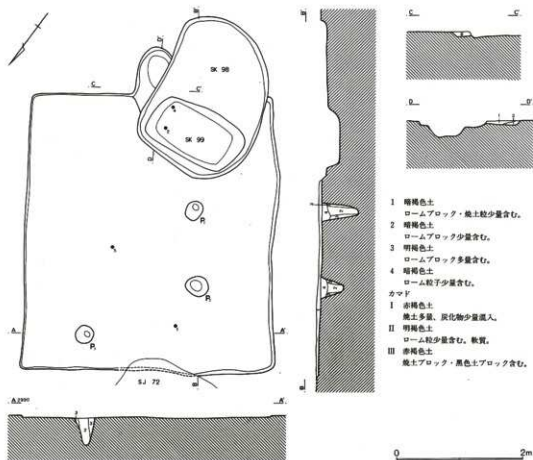
C区第73号住居跡(第474図)

F-26・27区に位置し、第72号住居跡に北壁部を切られ、第98・99号土壌によってカマドを破壊されていることが判明した。形態は長方形を呈し、規模は長軸4.30m、短軸3.90m、深さは5cm程と非常に浅い。主軸方位はS-36°-Eを示す。

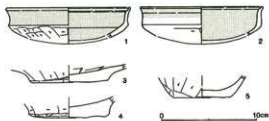
床面はほぼ平坦である。覆土はロームブロックと焼土を含む暗褐色土を基調としていたが、覆土が薄く堆積状態は明らかにできなかった。

カマドは南壁に位置するが、西半は土壌によって大きく破壊されていた。覆土には焼土が多量に含まれているが詳細は不明である。袖部は検出されなかった。

ピットは3本検出され、埋土の状態から住居に伴う柱穴と判断されたが、配置は不規則である。壁溝及び貯蔵穴は検出されなかった。



第474図 C区第73号住居跡



第475図 C区第73号住居跡出土遺物

出土遺物は少ない。土師器と須恵器があるが後者は土壌に伴う遺物であることが判明した。土師器は坏が7点、甕が3点、壺が4点検出された。第475図1・2は比企型坏で、口径は13cm前後になるものと思われる。ある程度の幅を見ても稲荷前I期～II期に比定されよう。

C区第73号住居跡出土遺物観察表(第475図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(13.0)	3.2		ABC	A	にお遣	20%	No3 床面 赤彩
2	坏	12.8	3.1		AB	A	にお遣	10%	No31 カマド内 赤彩
3	壺		1.8	7.8	ABCE	B	浅黄橙	80%	覆土 底部木葉痕
4	壺		2.2	8.5	ABCE	B	浅黄橙	100%	No37 カマド内
5	甕		2.3	5.9	ABC	A	褐灰	50%	No10 床面

C区第74号住居跡(第476図)

F-25・26区に位置する。第75号住居跡に切られ、第76号住居跡をカマド煙道部が切っていた。形態は方形を呈し、規模は長軸3.86m、短軸3.46mを測る。遺構確認段階で床面が露出していた。主軸方位はN-7°-Wを示す。

床面は部分的に残存する程度で、大半は既に削平されていた。覆土の状況も不明である。

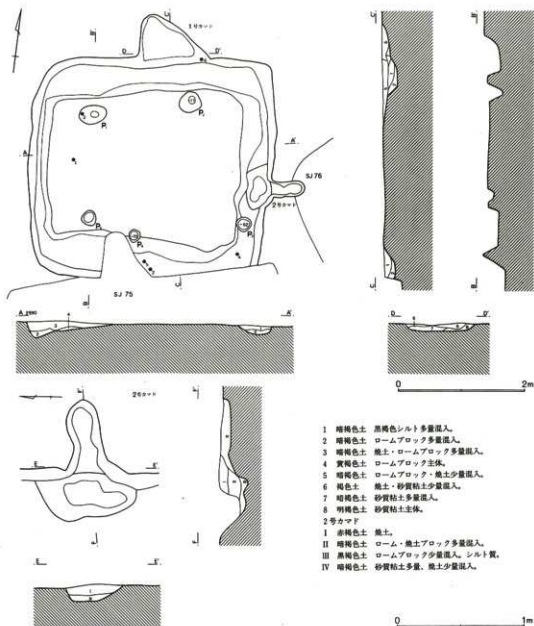
カマドは北壁と東壁に各1基検出された。1号カマドは北壁に設置される。壁外に約60cm掘り込まれ、最大幅は1.18mを測る。覆土には砂質粘土と少量の焼土が含まれていた。袖は検出されなかった。

第2号カマドは東壁に設置される。煙道部は壁を約55cm切り込んでほぼ水平に延び、先端は第76号住居跡の覆土を切っている。燃焼部はほぼ壁内にあるものと思われ、煙道部よりも一段深く掘り込まれている。覆土は4層に分かれる。第I・II・IV層は天井部崩落土、第III層は掘り方かもしれない。袖は検出されなかった。2基のカマドの新旧関係は住居内に堆積したカマド埋土の遺存状態から、第1号カマドから第2号カマドに付け替えられたものと推定される。

貯蔵穴は検出されなかった。ピットは5本検出されたが、柱穴配置は不明である。

住居壁に沿って、幅30～80cm、深さ20～30cmの掘り方が全周する。覆土はロームブロックを多量に含む黄褐色、または暗褐色土で形成されていた。

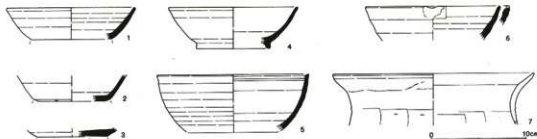
出土遺物は少ない。土師器は甕1点、須恵器は坏6点、高台坏1点、碗1点、片口鉢?1点と瓶類胴部片が検出された。第477図1～3は須恵器坏で、器形は不明であるが、底部は再調整されている。4は高台坏で底部を欠く。5は碗で、口縁部内面は沈線状に凹む。6は本来坏であるが、口縁の1か所に内外面から粘土を貼付している。口唇部が欠けているために断定はできないが、片口鉢とした可能性がある。7は土師器の武藏型甕である。須恵器の様相から稲荷前VIII期を中心とする時期と思われる。



第476図 C区第74号住居跡・カマド

C区第74号住居跡出土遺物観察表(第477図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(13.4)	3.3	(8.5)	ABC	A	灰白	25%	No8 床面
2	坏		2.7	(7.0)	ABC	A	灰白	20%	No13 掘り方内
3	坏		0.9	(7.4)	ABC	A	明緑灰	40%	No24 P ₁ 上面 底部内面磨滅
4	高台坏	(13.5)	4.3	(7.6)	ABC	D	浅黄橙	15%	No15 掘り方内 風化著しい
5	碗	(15.9)	5.9		ABC	A	灰白	25%	No12 床面 口唇内面沈線あり
6	片口鉢	(14.0)	3.6		ABC	B	灰	15%	No32 床面
7	甕	(21.0)	5.4		ABEJ	B	にじい	15%	カマド内



第477図 C区第74号住居跡出土遺物

C区第75号住居跡(第478図)

F・G-25.26区に位置する。第66・74号住居跡を切って構築されていた。形態は長方形を呈し、規模は長軸4.42m、短軸3.46m、深さ30cmを測る。主軸方位はN-9°-Wを示す。

床面は概ね平坦である。覆土は5層に分かれる。基本的にはロームブロックと焼土を含む黒褐色土で構成され、覆土中層には焼土がレンズ状に堆積していた(第3層)。

カマドは北壁に設けられる。焚口から先端までの長さは1.65m、幅90cmである。燃焼部底面はほぼ平坦で、先端部は直角近い角度で立上がる。覆土は6層に分かれる。第I～III層が天井部崩落土、第IV・V層が灰層に相当しようか。第VI層は流入土と思われる。袖は検出されなかった。

ピットは住居中央部から1本検出されたのみである。埋土の状態と深さからみて、柱穴にはならないものと考えられる。

壁溝は深さ10cm程で部分的に検出された。

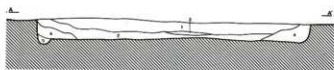
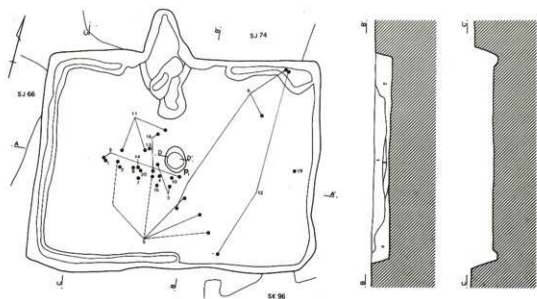
遺物は住居中央部の覆土中からまとまって出土している。おそらく、埋没時の流入、或いは投棄品が多かったものと推定される。土師器、須恵器、鉄器と土製支脚が出土した。土師器は甕が7点、小形甕1点、台付甕1点、鉢1点、須恵器は坏が70点、椀7点、蓋8点、甕1点、壺・瓶類2点(いずれも破片数)が検出された。

第479図1～7は須恵器坏である。4が最も大振りりで推定口径13.4cm、6が最小で口径11.6cm。その他は口径12cm大で構成される。底部調整は2が回転糸切りのままで、その他は回転糸切り後周辺部へラケズリ調整が施されている。椀は口唇部に内傾する面をもつもの(11・12)と、内傾面を失っているもの(10・13)がある。

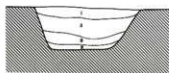
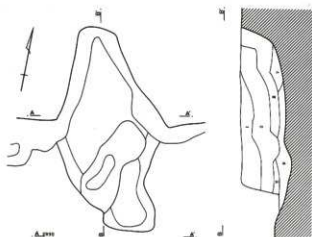
蓋は全形の判明するものが無い。8は小形で高台坏の蓋か。9は椀蓋で擬宝珠鈕が付される。14は壺、15は長頸瓶と思われる。

19は土製支脚である。残長10.9cm、重量380g。方柱状をなす。20は不明鉄器。錆化が著しい。両端は断面円形で口金を嵌めたようにも見える。中央部は断面方形か。工具の柄部の可能性があるが、遺存状態が悪く断定できない。

須恵器坏・椀類は稲荷前IX期、器壁の薄さや小振りの製品が含まれることから見ると一部はX期に降るかもしれない。但し4は口径が大きく厚手であることからVIII期に遡ると見てよからう。出土状況を考慮すると、本住居跡は稲荷前IX期頃に廃絶したものと考えられる。



0 2m



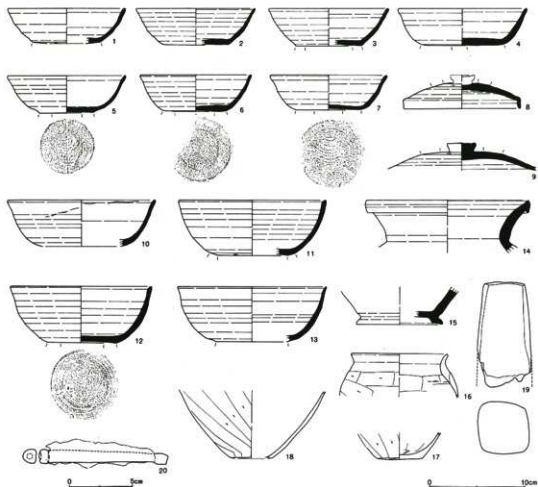
0 1m

- 1 黒褐色土 ロームブロック・焼土少量混入。
- 2 黒褐色土 ロームブロックと焼土多量混入。
- 3 赤褐色土 焼土主体、炭化物粒子多量混入。
- 4 黒褐色土 ロームブロック多量混入。
- 5 黄褐色土 ローム粒子多量混入。
- 6 黒褐色土 焼土ブロック多量混入。
- 7 黒褐色土 ローム・焼土ブロックを多量混入。

カマド

- I 暗褐色土 焼土・砂質粘土少量混入。
- II 黒褐色土 砂質粘土・焼土・ロームブロック多量混入。
- III 赤褐色土 焼土ブロック主体。
- IV 黒褐色土 焼土・炭化物・ソフトローム多量混入。
- V 黄褐色土 ロームブロック・焼土・炭化物混入。
- VI 黒褐色土 混入物なし。

第478図 C区第75号住居跡・カマド



第479図 C区第75号住居跡出土遺物

C区第75号住居跡出土遺物観察表(第479図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	环	(12.2)	3.7	(7.1)	ABC	A	緑灰	15%	No.19 覆土(+22cm)
2	环	(12.6)	3.8	(7.0)	ABC	A	灰白	20%	No.152 覆土(+16cm)
3	环	(12.5)	3.9	(7.0)	ABC	A	灰	45%	No.147,188 覆土(+11~19cm)
4	环	(13.4)	3.8	8.6	ABC	A	灰白	25%	No.30 覆土(+8cm) 全体にやや磨減
5	环	12.3	3.9	5.6	ABC	B	灰白	80%	No.64,153 覆土(+2~20cm)
6	环	11.6	3.8	6.7	ABC	B	灰	60%	No.107,159 覆土(0~+29cm)
7	环	(12.2)	3.6	6.9	ABC	A	灰	60%	No.145 覆土(+7cm)
8	蓋	12.1	2.7		ABC	A	オリーブ灰	80%	No.168 床面 鉋欠失
9	蓋		3.0		ABC	A	灰褐	25%	No.18,207,220 覆土(+11~24cm)
10	碗	(15.4)	4.8		ABC	A	灰	30%	No.187 覆土(+16cm) 底部欠失
11	碗	(15.5)	5.7	(7.4)	ABC	A	灰	15%	No.10,179,185 覆土(+9~28cm)
12	碗	14.7	5.9	7.2	ABC	B	灰白	70%	No.82,159 覆土(0~+10cm)
13	碗	(15.6)	5.7	(7.6)	ABC	A	灰白	10%	No.180 覆土(+17cm)
14	壺	(17.0)	5.5		ABC	A	灰	30%	No.26 覆土(+28cm)
15	壺		3.9	(9.0)	ABC	A	灰	20%	No.32 覆土(+15cm)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
16	小形甕	10.0	4.5		ABE	B	いぶき	45%	No8,177 覆土(+24~28cm)
17	甕		2.7	4.7	ABC	A	いぶき	80%	No223 覆土(+20cm)
18	甕		7.0	(4.6)	ABE	B	いぶき	15%	覆土 内面風化
19	支脚				ABC	A	橙		覆土 残長10.9cm 重量380g
20	鉄製品								No27 覆土(+21cm) 残長10.1cm

C区第76号住居跡(第480図)

F・G-26区に位置する。第77号住居跡を切り、第74号住居跡と第10号溝跡に切られていた。形態は方形を呈し、規模は長軸5.80m、短軸5.64m、深さ10~20cmを測る。主軸方位はN-53'-Eを示す。

床面は壁際がやや高く、中央部が低い傾向にある。覆土はロームブロックと焼土を多量に混在する暗褐色土を基調としており、人為的な埋め戻しの可能性がある。



カマドは北東壁中央に設置される。壁を60cm切り込んで構築され、幅90cmを測る。底面は床面と同一レベルで続き、掘り込みはない。また、先端部にはビットが掘り込まれるが、伴うものではない。覆土は5層に分かれ、第Ⅱ・Ⅲ層が天井部崩落土と推定される。袖は検出されなかった。

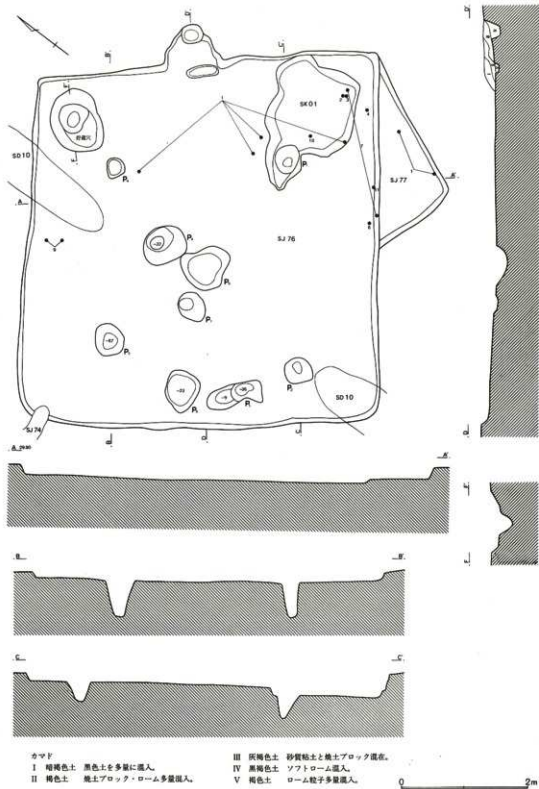
貯蔵穴と思われる掘り込みはカマド左脇のコーナーに設けられていた。底面は2段に掘り凹められ深さは33cm。

ビットは9本検出された。P₁~P₄が支柱穴に相当するものと考えられる。しかし、P₂については配置がややずれ、深度も浅いことから若干疑念は残る。土壌は1基カマド南側から検出された。不定形をなしロームブロックと黒色土の混土層で構成されていたことから住居掘り方と考えるのが妥当であろう。

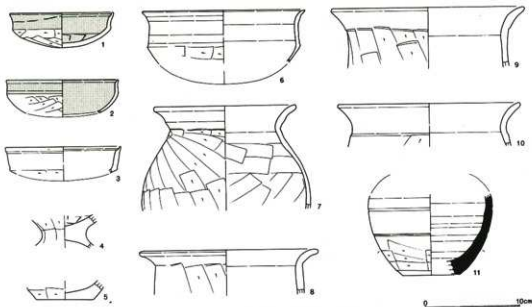
壁溝は検出されなかった。

出土遺物は土師器、須恵器の他に、灰軸陶器瓶胴部片と中世陶器片が混入していた。土師器は坏が12点、碗1点、甕6点、台付甕1点、須恵器は坏底部片、甕胴部片、水瓶胴部片が計10片検出された。須恵器は8世紀以降の混入である。

第481図1~3は比企型坏で、1・3は模倣坏系比企型坏に分類される。小型化が顕著に認められる。6は比企型坏系の碗と思われる。7は小形甕。8~10の甕は長胴甕となろう。11は須恵器水瓶と思われる。胴部に平行沈線が2条巡り、底部は無台。床面から出土したが混入の可能性が高い。小片が多く判断しがたい面があるが、幅を見て稲荷前Ⅲ期後半~Ⅳ期に位置付けられよう。



第480図 C区第76・77号住居跡



第481図 C区第76号住居跡出土遺物

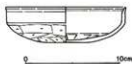
C区第76号住居跡出土遺物観察表(第481図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	10.8	3.7		ABC	A	橙	70%	No42,72他 覆土(+4~10cm) 赤彩
2	環	(11.6)	3.5		ABC	B	におい橙	20%	No9 覆土(+7cm) 赤彩
3	環	(12.0)	2.8		ABC	A	におい橙	20%	No8 覆土(+10cm) 無彩
4	台付甕		3.5		ABC	B	におい橙	80%	No5 覆土(+10cm)
5	甕		2.0	(6.0)	ABC	A	におい橙	30%	Pit内 底部木炭痕跡
6	柄	(17.1)	5.6		ABC	B	浅黄橙	10%	No31 覆土(+12cm)
7	小形甕	(14.6)	10.9		ABCE	A	におい橙	25%	No30,128 覆土(+5~13cm)
8	甕	(18.6)	4.8		ABCE	A	橙	10%	Pit内
9	甕	(20.0)	6.4		ABC	B	浅黄橙	20%	No79,82 覆土(+1~7cm)
10	甕	(19.0)	4.5		ABEF	B	浅黄	10%	No15 覆土(+8cm) 全体に風化
11	水瓶		8.4	(6.0)	ABC	A	灰	15%	No26 床面

C区第77号住居跡(第480図)

F・G・26区に位置し、第76号住居跡に大半を切られていた。形態は方形を呈するものと推定される。残存規模は長軸2.60m、短軸1.38mで、何れにしても小規模の住居跡となろう。深さは10cm。主軸方位はN-25°-Eを示す。

床面は平坦である。覆土は暗褐色土で構成される。



第482図 C区第77号住居跡出土遺物

カマド、貯蔵穴、ピットは検出されなかった。出土遺物は土師器環と甕が各1点出土したのみである。第482図1は模倣環系の比企型環で口径12.6cmを測る。時期を限定するには資料不足であるが、環の様相から稲荷前II期頃と思われる。

C区第78号住居跡(第483図)

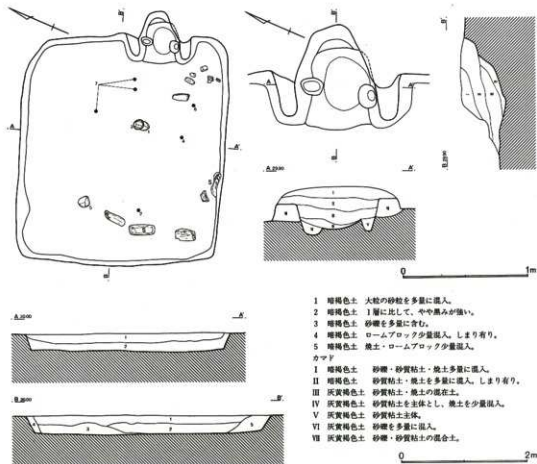
G-26・27区に位置する。形態は方形を呈し、規模は長軸3.52m、短軸3.26m、深さ30cmを測る。主軸方位はN-69°-Eを示す。

床面は概ね平坦であるが中央部が僅かに深い。覆土は5層に分かれる。暗褐色土を基調に砂礫の混入が目立つ。

カマドは東壁に設けられる。全長82cm、燃焼部幅60cmで燃焼部先端、及び煙道部は壁を40cm程切り込んで構築されていた。燃焼部底面には両側壁に沿って2基の小ピットが掘り込まれていた。覆土は6層に分かれ、第I~IV層は天井部崩落土に相当しよう。袖は砂礫混じりの灰黄褐色粘土で構成されていた。

貯蔵穴及びピットは検出されなかった。

出土遺物は土師器と大型の礫がある。礫と土器の大半は覆土から出土しており直接伴うものは少

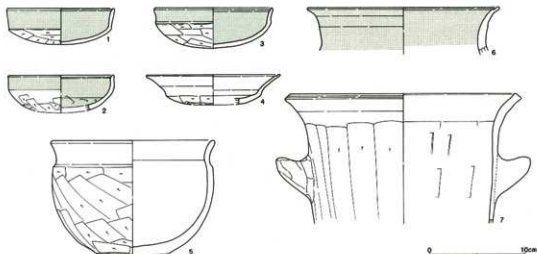


- 1 暗褐色土 大粒の砂礫を多量に混入。
- 2 暗褐色土 1層に比して、やや黒みが強い。
- 3 暗褐色土 砂礫を多量に含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロック少量混入。しまり有り。
- 5 暗褐色土 焼土・ロームブロック少量混入。

カマド

- I 暗褐色土 砂礫・砂質粘土・焼土多量に混入。
- II 暗褐色土 砂質粘土・焼土を多量に混入。しまり有り。
- III 灰黄褐色土 砂質粘土・焼土の固定土。
- IV 灰黄褐色土 砂質粘土を主体とし、焼土を少量混入。
- V 灰黄褐色土 砂質粘土主体。
- VI 灰黄褐色土 砂礫を多量に混入。
- VII 灰黄褐色土 砂礫・砂質粘土の混合土。

第483図 C区第78号住居跡・カマド



第484図 C区第78号住居跡出土遺物

ない。土師器は坏が5点、皿1点、壺1点、甌1点、鉢1点が検出された。第484図1～3は比企型坏で、1・3は模倣坏系と思われる。1と3は中央部の覆土中層から坏が3枚重なった状態で出土した内の2点である。もう1点は残念ながら紛失した。4は比企型坏系の皿である。5は鉢または小形甕で二次被熱を受けている。6は壺口縁で赤彩される。7は把手付きの甌である。土師器環類の様相から稲荷前Ⅲ期に比定しておきたい。

C区第78号住居跡出土遺物観察表(第484図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	構成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	11.1	3.8		ABC	A	にぶい橙	95%	No29 覆土(+8cm) 赤彩
2	坏	(11.0)	3.8		ABC	A	橙	25%	No8 覆土(+24cm) 赤彩
3	坏	(12.4)	4.3		ABC	B	にぶい橙	70%	No28 覆土(+12cm) 赤彩
4	皿	14.0	3.1		ABC	B	にぶい青	25%	No12 覆土(+7cm) 無彩
5	鉢	(16.8)	12.1	7.6	ABCJ	B	浅黄橙	35%	No24 覆土(+14cm)
6	壺	(20.0)	4.9		ABC	A	にぶい橙	15%	No15 覆土(+5cm) 赤彩
7	甌	(23.7)	13.5		ABCE	B	橙	20%	No11,20,21 床面

C区第79号住居跡(第485図)

G-26区に位置する。南壁部を第6号溝跡に破壊され、遺存状態は良くない。また、北西コーナーは第95号土塊と重複しているが新旧関係は明確に捉えられなかった。形態は長方形を呈するものと推定されるが、東壁南端部が大きく張り出していた。規模は長軸をSK02南壁部までとすると4.40m、短軸3.40m、深さ10cmを測る。主軸方位はN-6°-Wを示す。

床面は南側に向かって傾斜しており一定しない。覆土は砂礫を多量に含む黒褐色土で形成されていた。

カマドは北壁に設けられている。規模は長さ1.02m、幅66cmで、燃焼部底面は床面から15cm掘り凹められている。覆土は3層に分かれ、ローム粒子と焼土が多量に含まれていた。火床面は掘り方底面になるのか、第Ⅲ層上面がそれに相当するのか判然としない。袖は明確に検出することはでき

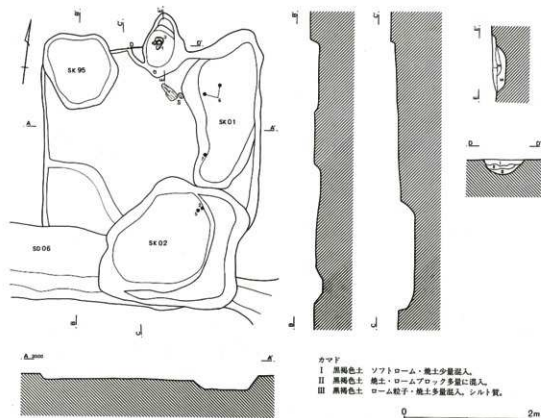
なかった。

土塊状の落ち込みは2か所検出された(SK01・02)。何れも不定形な形状で、住居内に納まることから掘り方と推定される。SK01の底面からは青銅製巡方が出土した。ピット、貯蔵穴等の施設は検出されなかった。

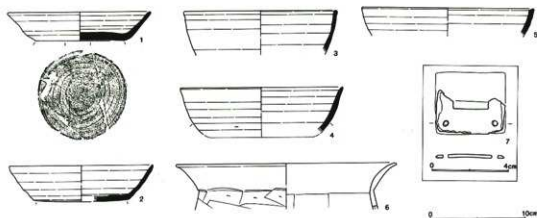
出土遺物は土師器と須恵器、青銅製巡方、灰釉陶器碗がある。土師器は坏が3点、甕4点、壺2点、須恵器は坏が9点、碗3点、蓋1点、甕1点がそれぞれ検出された。灰釉碗は底部破片で混入である。

第486図1・2は須恵器坏。1はカマド内第Ⅲ層上面から出土した。2はSK02内出土。いずれも口径15cmと大振りで、前者の底部には静止糸切り痕が残る。3～5は須恵器碗で、口縁部形態は全て異なっている。

7は青銅製巡方の裏金と思われる。残長2.1cm、幅3.5cm、厚さ0.15cm。垂孔は一端を欠くが、コーナーと思われる屈曲が破面に僅かに確認され、長さ0.4cm、幅1.9cmの細長の長方形を呈するものと考えられる。下端部左右の隅には径0.2～0.25cmの留孔が穿たれている。また、表面と垂孔長辺には僅かながら銀と思われる物質が残り、本来鍍銀されたものと推定される。土器様相、特にカマド内出土の1を基準に稲荷前Ⅶ期に比定して良からう。4はやや不安があるが他の土器群とも矛盾しない。



第485図 C区第79号住居跡



第486図 C区第79号住居跡出土遺物

C区第79号住居跡出土遺物観察表(第486図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	構成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	15.0	3.0	9.4	ABC	A	オリーブ	90%	カマド覆土
2	環	(15.0)	3.8	(10.2)	ABC	A	灰	25%	No.73 住居内 SK02(掘方-7cm)
3	碗	(16.0)	4.6		ABC	A	灰	10%	カマド内
4	碗	(17.0)	4.8		ABC	A	暗灰	10%	覆土
5	碗	(15.0)	3.8	(10.2)	ABC	A	灰	5%	No.19 床面
6	甕	(23.0)	4.8		ABE	A	におき	20%	No.55,56 床面
7	巡方								No.81 SK01内底面 銅製巡方

C区第80号住居跡(第487図)

F-27区に位置する。形態は方形を呈し、規模は長軸5.10m、短軸4.90m、深さ20cmを測る。主軸方位はN-2°-Wを示す。

床面は全体的に堅く締まっているが、凹凸が比較的顕著であった。覆土はロームを多量に含む暗褐色土を基調とする。

カマドは北壁に設けられる。規模は小さく、長さ64cm、幅74cmを測る。おそらく燃焼部のみ遺存し煙道部は削平されたものと推定される。覆土は3層に分かれる。第I~III層は点上部崩落土に相当しよう。袖は黒色土混じりの灰褐色粘質土を用いて構築されているが、遺存状態は悪く、左袖部は明確に捉えることはできなかった。

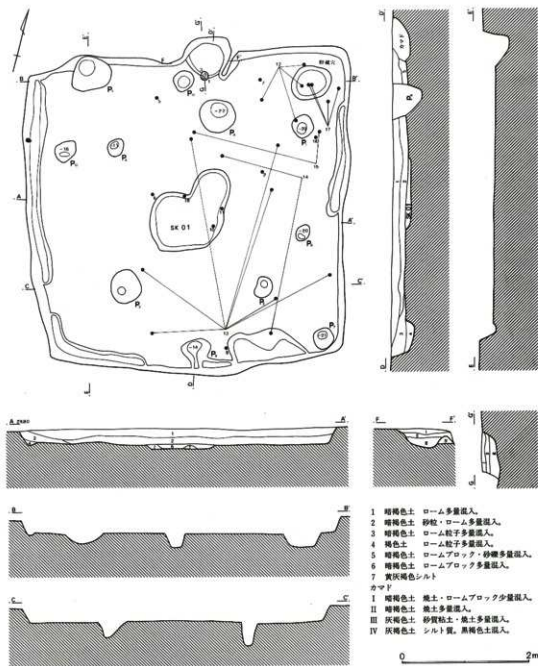
貯蔵穴は北東コーナー内側に設置される。径55cmの円形プランを呈し、深さは23cmを測る。覆土には焼土粒子が多量に含まれていた。

ピットは11本検出された。P₁~P₄は4本支柱穴を構成するものと考えられるが、P₁のみやや不規則な配置となる。他のピットは直接伴うものではなからう。また、住居中央部に不整形の土塊(SK01)が検出された。上面に貼床が施され、住居に伴う床下土塊または掘り方と推定される。

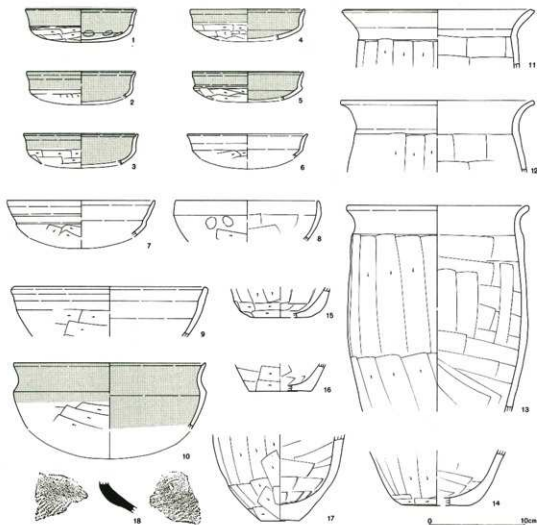
壁溝は北壁を除き断続的に巡る。特に南壁部では不規則となっていた。

出土遺物は土師器と須恵器が検出された。土師器は坏が27点、碗4点、甕11点、須恵器は坏、蓋、甕の破片が数点検出されている。須恵器はほとんどが混入である。土師器坏は比企型坏が14点、横

倭環系のそれが6点、模倣環が1点、暗文環が1点(混入と思われる)、模倣環系比企型環か不明なもの5点となる。第488図1～6は土師器環。1～3は口縁下に腰を残す比企型環、4・5は模倣環系比企型環、6は模倣環である。1と3はカマド焚口部から2枚重なった状態で出土した。甕はいわゆる長胴甕で、12・13は胴部に膨らみを残す。18は須恵器甕の頸部片外面平行叩き、内面当て具をなで消す。混入か。土師器環及び甕の様相から稲荷前III期に比定されよう。



第487図 C区第80号住居跡



第488図 C区第80号住居跡出土遺物

C区第80号住居跡出土遺物観察表(第488図)

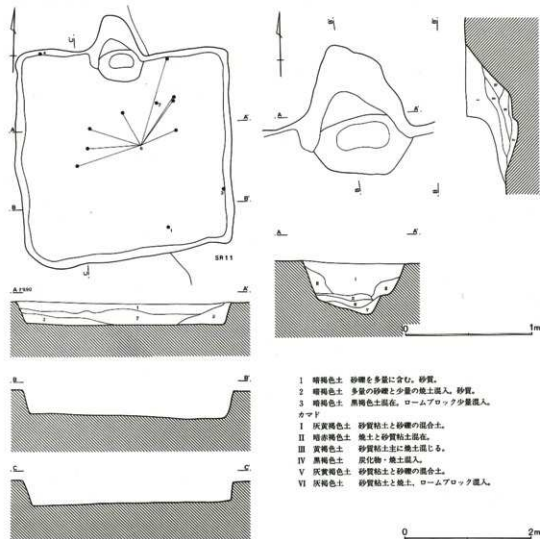
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	11.6	3.5		ABC	B	にぶい橙	90%	No.179 カマド内 赤彩
2	坏	(11.4)	2.9		ABC	B	にぶい橙	10%	No.152 覆土(+19cm) 赤彩
3	坏	12.0	3.2		ABC	B	にぶい橙	50%	No.180 カマド内 赤彩
4	坏	(12.0)	3.2		ABC	A	にぶい黄橙	20%	カマド内覆土 赤彩
5	坏	(11.6)	3.0		ABC	A	にぶい橙	20%	No.148 覆土(+8cm) 赤彩
6	坏	(12.6)	2.6		ABC	A	にぶい橙	10%	No.132 覆土(+17cm) 無彩
7	坏	(15.4)	3.9		ABCE	B	橙	10%	No.87 覆土(+17cm) 無彩
8	碗	(15.0)	4.3		ABC	C	にぶい橙	15%	No.18 覆土(+20cm) 無彩
9	鉢	(20.0)	5.2		ABC	B	灰褐色	15%	カマド内覆土
10	鉢	(20.0)	7.0		ABC	A	橙	10%	No.22,125 覆土(+14cm) 赤彩
11	甕	(19.6)	7.2		ABC	A	灰黄褐色	20%	No.178 床面
12	甕	(20.0)	7.5		ABC J	A	にぶい橙	10%	No.83,84 覆土(0~+10cm)
13	甕	(18.7)	21.5		ABC J	A	にぶい橙	25%	No.7,49 覆土(0~+19cm)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
14	甕		5.8	(7.4)	ABC	A	にぶい青	25%	No11,102 覆土(+18cm)
15	甕		3.2	(6.5)	ABC	A	にぶい青	45%	No74,135 覆土(+9~15cm)
16	甕		2.9	(6.5)	ABC	A	にぶい青	15%	No73 覆土(+17cm)
17	甕		9.0	4.0	ABC	A	にぶい青	60%	No81他 覆土(+8~20cm),貯穴内
18	甕				ABC	C	灰オリブ		No117 覆土(+12cm)

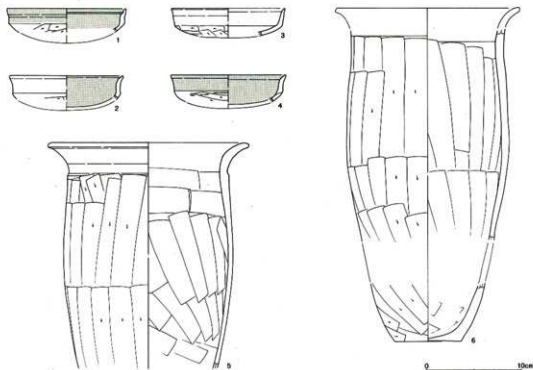
C区第81号住居跡(第489図)

F-27区に位置する。住居東半は第11号方形周溝墓西溝上に位置する。形態は方形を呈し、規模は長軸3.40m、短軸3.34m、壁高は40cmと深い。主軸方位はN-2°-Wを示す。

床面は周溝墓覆土上に位置する東壁部に向かって深くなっている。覆土は4層に分かれる。1次堆積の第3層はロームブロックと黒褐色土が混じり軟質、2次堆積の1・2層は砂礫を多く含む堅く



第489図 C区第81号住居跡・カマド



第490図 C区第81号住居跡出土遺物

締まっていた。

カマドは北壁に設置されていた。焚口から先端までの長さ100cm、焚口幅80cmを測り、底面は床面から12cm掘り凹められている。奥壁は壁を切り込んでかなり急角度で立上がる。覆土は砂質粘土を主体に構成され6層に分かれる。第I～III層は天井部崩落土、第IV層は灰層に相当しようか。第V層は掘り方埋土と思われる。袖は既に崩壊しており、その痕跡を留めていなかった。また、貯蔵穴、ビット等の施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器と須恵器が検出された。土師器は坏が8点、碗1点、甕3点、小形甕1点、須恵器は坏底部が1点と甕胴部が1点出土しているが、混入と思われる。土師器坏は比企型坏が5点、模倣坏そのものが3点となる。第490図1～4は比企型坏である。全て小片であり、あまり良好な資料とはいえない。5・6は長胴甕で胴部中に僅かに彫らみを残す。

C区第81号住居跡出土遺物観察表(第490図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置、その他
1	坏	(12.4)	2.5		ABC	A	にぶい黄	10%	No8 覆土(+29cm) 赤彩
2	坏	(11.8)	2.5		AB	A	にぶい黄	5%	No40 覆土(+9cm) 外面赤彩不明
3	坏	(11.9)	2.9		ABC	B	灰黄褐	20%	No20 覆土(+32cm) 無彩
4	坏	(11.8)	2.8		ABC	A	にぶい黄	10%	No57 覆土(+6cm) 赤彩
5	甕	(20.0)	23.7		ABCE	A	にぶい黄	35%	カマド内覆土
6	甕		35.0	7.0	ABCE	A	にぶい黄	40%	No26,30他 覆土(+16~31cm)

C区第82号住居跡(第491図)

調査区北東部のE-29区に位置する。住居北隅は水田構築の際に削平されていた。形態は方形を呈するものと推定され、規模は長軸2.40m、短軸2.36m、深さは南壁部で30cmを測る。主軸方位はN-43°-Eを示す。

床面はほぼ平坦で全体に軟弱であった。覆土は5層に分かれ、ローム粒子と砂礫の混入が目立つ。

カマドは北東壁に位置する。先端部は削平され遺存状態は悪いが、辛うじて右袖部は残存していた。燃焼部底面は床面から10cm程掘り込まれ、埋土の状況から第I層下面が火床面に、第II・III層は掘り方に相当するものと思われる。右袖部は褐色粘土を用いて構築されていた。

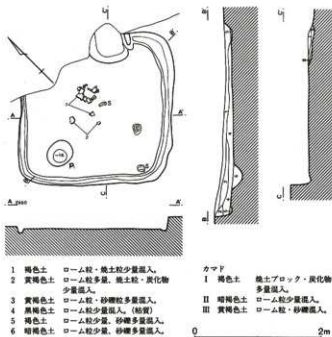
ピットは1本検出され、断面観察から住居に伴うものと判断された。

壁溝は深さ5cm以下と浅く、残存部は全周する。

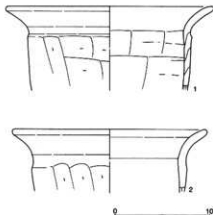
出土遺物は土師器甕が2点あるのみで極めて少ない。

第492図1・2は住居中央部の床面より浮いた状態で出土した長胴甕である。最大径は口縁部にあり、胴部に膨らみは見られないようである。

時期の限定は難しいが、7世紀中葉～後半頃に位置付けられようか。



第491図 C区第82号住居跡



第492図 C区第82号住居跡出土遺物



遺物出土状況

C区第82号住居跡出土遺物観察表(第492図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	(21.4)	8.7		ABC	A	いぶき	25%	No1,2 覆土(+4~9cm)
2	甕	(20.0)	6.6		ABC	A	いぶき	15%	No3,4 覆土(+9~13cm)

C区第83号住居跡(第493図)

F-29-30区に位置する。住居の大半は削平され詳細は不明。残存規模は長軸2.82m、短軸1.80m、深さは西壁部で15cmを測る。主軸方位はN-37°-Wを示す。

床面は凹凸がある。覆土はローム粒子を多量に含む黒褐色土を基調としていた。

カマドは北西壁に位置する。焚口にはビット状の掘り込みがあり、先端は僅かに壁を切り込んでいる。覆土は4層に分かれ、第III層下面が火床面に相当しよう。袖は灰褐色粘質土で構築され基底部分が僅かに残存する。

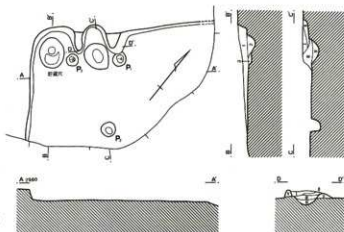
貯蔵穴はカマド脇の西隅に設けられている。長径44cmの楕円形プランを呈し、深さは12cmを測る。埋土には炭化物粒子が少量含まれていた。

ビットは3本検出されたが柱穴とはならないであろう。

出土遺物は少なく、土師器環が3点、甕胴部1点、須恵器瓶類の底部片1点が検出されたに留まる。第494図1は企企型環、2は模倣環か。3は長頸瓶底部である。7世紀代と思われるが時期の限定は困難である。

C区第83号住居跡出土遺物観察表(第494図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	(12.0)	3.3		ABE	A	橙	10%	覆土 無彩
2	環	(11.0)	1.9		B J	A	橙	5%	覆土 赤彩
3	瓶		2.1	(10.0)	ABC	A	灰	5%	覆土 胴部下端へラケズリ



- 1 黒褐色土 ローム粒多量混入。
- 2 暗褐色土 炭化物少量混入。(貯穴)
- 3 黄褐色土 ローム多量混入。(貯穴)
- カマド
- I 赤褐色土 焼土粒子・ブロック混入。
- II 褐色土 炭化粒・焼土粒子混入。
- III 黄褐色土 焼土粒・炭化粒混入。
- IV 黄褐色土 ロームブロック多量混入。
- V 灰褐色土 粘質土。ローム混入。

第493図 C区第83号住居跡



第494図 C区第83号住居跡出土遺物

C区第84号住居跡(第495図)

G-28区に位置する。形態は長方形を呈し、規模は長軸3.64m、短軸2.98m、深さ10cmを測る。主軸方位はN-88°-Eを示す。

床面は礫が浮き出た状態で凹凸をもつ。覆土は暗褐色土を基調とし、上層には砂粒が、下層には黒色土ブロックが多量に含まれていた。

カマドは東壁に位置する。焚口から先端までの長さは1.62m、最大幅1.02mを測る。覆土は4層に分かれ、第I-III層が天井部崩落土、第IV層は掘り方か。袖は検出されなかった。

貯蔵穴、ビット等の付属施設は存在しない。

出土遺物は土師器と須恵器、勾玉がある。土師器は甕が5点、小形甕2点、台付甕2点、須恵器は坏が34点、椀3点、甕1点、甌1点、瓶類1点が検出された。

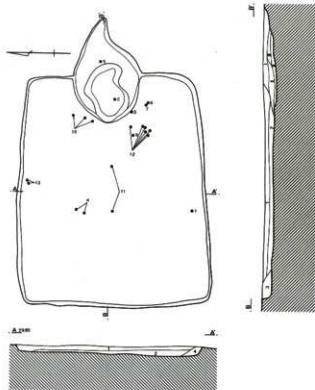
第496図1-5は須恵器坏で、底部は回転糸切り後無調整である。底径は口径の1/2を切るもの(1・3)と上回るもの(2)がある。椀は2タイプ

あり、何れも深碗形態である(6・7)。10は須恵器甌で、底部は楕円形に穿孔され、橋状を呈する。

土師器甕(12-14)はいわゆる「コ」の字状口縁甕である。13・14は小形で台付甕かもしれない。15は滑石製勾玉である。全長2.4cm、厚さ0.9cm、孔径0.15cmで両面から穿孔される。混入と考えられる。須恵器坏類と土師器甕の様相から稲荷前Ⅱ期-Ⅲ期に位置付けられるが、主体はⅢ期にあると思われる。

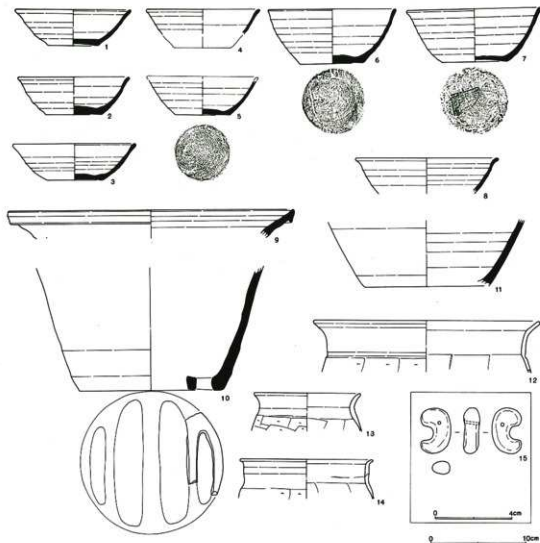
C区第84号住居跡出土遺物観察表(第496図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.0)	3.8	5.1	AB	C	浅黄橙	60%	No99 覆土(+5cm)
2	坏	(11.5)	3.9	6.0	ABC	A	青灰	20%	No96 床面
3	坏	(12.7)	3.8	5.7	ABC	D	灰褐	70%	No27 覆土(+7cm)
4	坏	(11.7)	2.6		ABC	A	暗青灰	25%	No68,92 覆土(0~+4cm)



- 1 暗褐色土 砂粒多量混入。
- 2 暗褐色土 黒色土の混入土。
- 3 暗褐色土 砂粒多量混入。
- 4 暗褐色土 焼土多量混入。
- カマド
- I 黒褐色土 大粒焼土ブロック多量混入。
- II 暗褐色土 焼土・炭化物等に多量混入。
- III 褐色土 焼土ブロック多量に混入。
- IV 黒褐色土 焼土・炭化物少量混入。

第495図 C区第84号住居跡



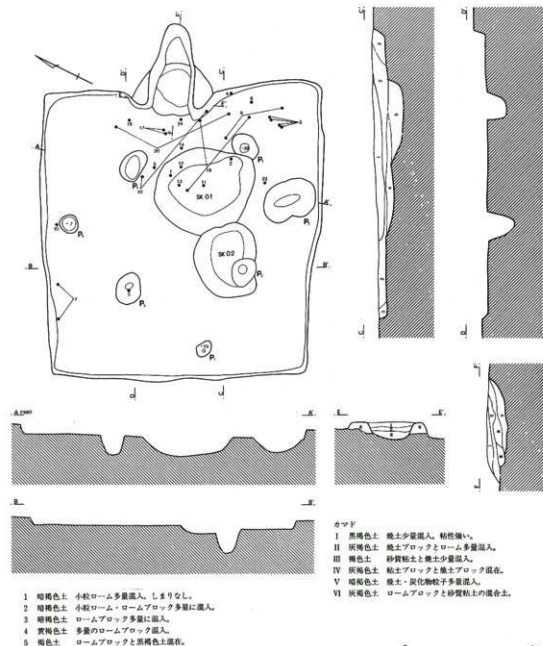
第496図 C区第84号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	構成	色調	残存	出土位置・その他
5	坏		3.6	5.7	ABC	B	浅黄橙	70%	No107 覆土(+6cm),カマド内
6	碗	13.4	5.7	6.7	ABC	B	にぶ橙	70%	覆土
7	碗	(14.0)	6.8		ABC	A	灰	60%	覆土
8	坏	(14.7)	3.7		ABC	B	暗灰黄	15%	カマド内覆土
9	甕	(30.0)	2.9		ABC	B	灰	5%	No11 床面
10	甕		12.9	(15.0)	ABC	B	淡黄	15%	No1,2,88 覆土(+6~12cm)
11	坏		6.9	(13.0)	ABC	A	灰	15%	No6,65 覆土(+4~6cm) 底部剥落
12	甕	(23.5)	5.4		ABC	A	橙	15%	No14,19他 覆土(+2~10cm)
13	小形甕	11.0	4.0		ABE	A	にぶ橙	60%	No80,81,102 覆土(+4~8cm)
14	小形甕	13.6	4.1		ABE	A	橙	10%	カマド内
15	勾玉								全長2.4,最大厚0.9,孔径1.5cm 滑石製

C区第85号住居跡(第497図)

H-28・29区に位置する。形態は方形を呈し、規模は長軸4.52m、短軸4.44m、深さ10~20cmを測る。主軸方位はN-64°-Eを示す。

床面は全体に堅いが起伏がある。覆土はロームブロックを多量に含む暗褐色土を基調としていた。カマドは東壁に設けられていた。長さは1.46m、燃焼部上幅70cmを測り、底面は床面から10cm掘り凹められている。覆土は5層に分かれる。第I~IV層は天井部崩落土、第V層は灰層として良い



第497図 C区第85号住居跡

か良く判らない。袖は基底部のみ残存し、ロームブロックと焼土を含む粘質土で構築されていた。

ビットは7本検出され、P₁~P₄が主柱穴に相当しよう。他のビットは直接伴うものではない。住居中央部から土壌が2基検出された。埋土は黒色土とロームブロックの混土層で構成され、床下土壌と推定される。

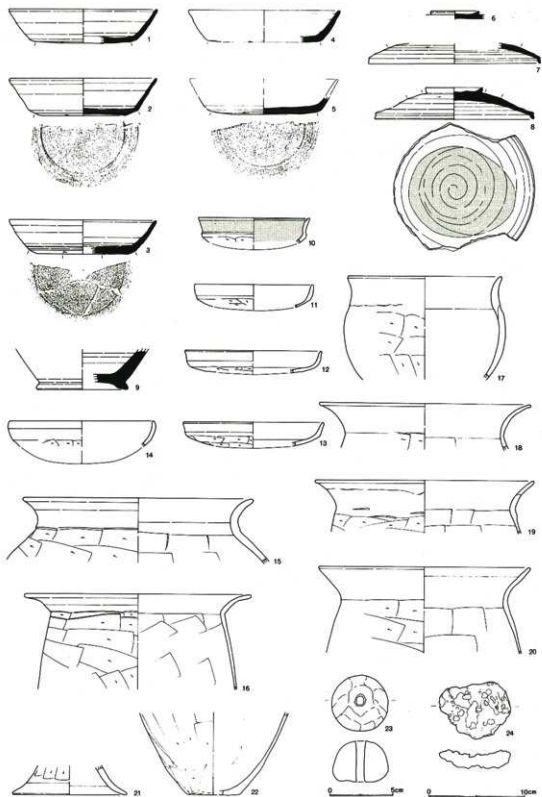
出土遺物は土師器と須恵器、紡錘車、鉄滓がある。土師器は環が10点、甕11点、台付甕1点、小形甕1点、須恵器は環が11点、蓋3点、長頸瓶1点、甕胴部片2点が検出された。土師器環は模倣環系比企型環3点、北武蔵型環4点、硬質な焼き上がりの環2点、暗文環1点に分かれる。

第498図1~5は須恵器環で、何れも口径15cm代の大振りな一群で構成される。全て底部は回転ヘラケズリ調整されるが、3は体部下端まで削られ、底部中心には静止糸切り痕が残る。6~8は蓋で、6・8は環状鈕が付される。8の内面は磨滅し、破面も古いことから転用砦の可能性もある。

10~14は土師器環。10は混入の可能性が高い。11はおそらく在地産と思われる環で、硬質な焼き上がりである。12~14は北武蔵型環で、12・13は皿状を為す。16・18~20は土師器甕。口縁部の屈曲が強いものと、「く」の字状に折れるものがある。23は土製紡錘車。直径4.5cm、厚さ3.2cm、重量65g。軸孔は径0.7cmで中心を外れる。指撫により整形されている。24は椀形滓。長径7.5cm、短径5.7cm、最大厚1.8cm、重量90g。上面は平坦で下面は湾曲する。黒褐色を呈する重量感のある滓である。出土遺物は稲荷前VI~VII期の土器群を中心に構成されているものと考えられる。

C区第95号住居跡出土遺物観察表(第498図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	(15.4)	3.6	(11.3)	ABC	A	灰	20%	No52 覆土(+18cm)
2	環	(15.3)	3.9	(11.5)	ABC	A	灰白	45%	No184 覆土(+4cm)
3	環	(15.4)	3.6	9.6	ABC	A	灰	40%	No88,131他 覆土(+18~25cm)
4	環	(15.8)	3.4	(11.7)	ABC	A	灰白	10%	No167 覆土(+15cm) 口唇部内面磨滅
5	環		1.8	11.2	ABC	A	灰白	50%	No182 P ₃ 内(-6cm)
6	蓋		0.8		ABC	B	灰	80%	No25 覆土(+18cm) 鈕径5.0cm
7	蓋	(17.8)	2.1		ABC	A	灰白	20%	No113,115 覆土(+11~13cm)
8	蓋	(16.5)	3.3		ABC	A	灰白	80%	No185 覆土(+15cm)
9	瓶		4.3	9.3	ABC	A	灰	30%	No73,86 覆土(+17cm)
10	環	(11.6)	2.6		ABC	A	浅黄橙	10%	No112 覆土(+10cm) 赤彩
11	環	(12.4)	2.4		AB	A	橙	10%	No69 覆土(+14cm) 硬質
12	環	(14.2)	2.3		BE	A	にぶ青	10%	No57 覆土(+19cm) 北武蔵型
13	環	(14.6)	2.5		BE	A	にぶ青	10%	No53 覆土(+15cm) 北武蔵型
14	環	(15.0)	2.7		BE	A	浅黄橙	10%	No55 覆土(+7cm) 北武蔵型
15	甕	23.8	6.8		ABC J	B	にぶ青	35%	No148,175 覆土(+2~24cm)
16	甕	23.6	9.9		ABE	A	にぶ青	35%	カマド内
17	小形甕	(16.0)	10.8		ABCE	B	にぶ青	15%	No43,44 覆土(+18cm)+カマド内
18	甕	(22.0)	4.8		ABE	A	にぶ青	10%	カマド内
19	甕	22.6	5.5		ABE	A	にぶ青	90%	No64他 覆土(+2~23cm)+カマド内
20	甕	(22.0)	9.0		ABE	A	にぶ青	15%	No6,79 覆土(+11~21cm)
21	台付甕		3.0	(11.8)	ABE	B	にぶ青	20%	カマド内
22	甕		8.6	5.5	ABE	A	にぶ青	50%	No22,138 覆土(+12~14cm)
23	紡錘車				ABC	A	暗灰	100%	No132 覆土(+12cm)
24	椀形滓								No183 カマド前

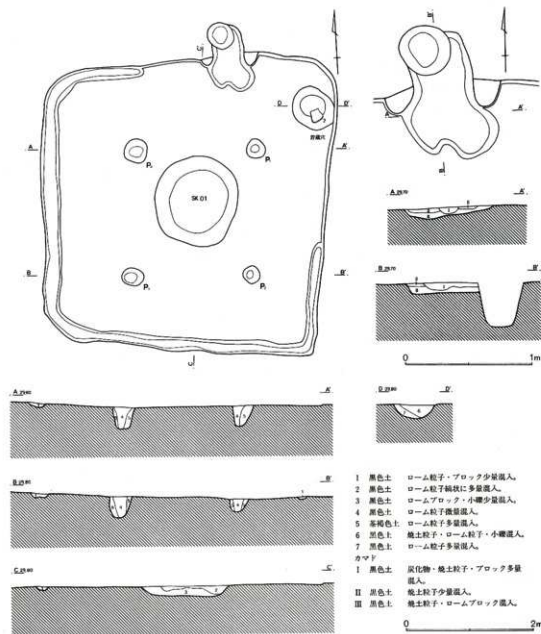


第498图 C区第85号住居跡出土遺物

C区第86号住居跡(第499図)

調査区南東部のK・L-29区に単独で位置する。形態は方形を呈し、規模は長軸4.60m、短軸4.56mを測る。深度は浅く遺構確認段階ではほぼ床面まで達していた。主軸方位はN-3°-Wを示す。床面は平坦である。覆土は残存しない。

カマドは北壁に位置する。先端部はピットの攪乱を受ける等遺存状態は悪い。長さは1.00m、焼焼部幅50cmで、底面は床面を10cm掘り込んでいた。覆土は焼土混じりの黒色土で構成されるが詳細は不明である。袖部には褐色粘質土が僅かに残存していた。



第499図 C区第86号住居跡・カマド

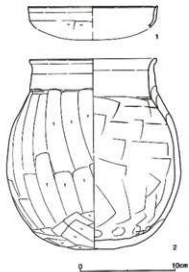
貯蔵穴はカマド脇の北東コーナーに設置される。長径70cmの楕円形プランを呈し、深さは20cm。

ビットは5本検出された。P₁～P₅は規則的に配置され主柱穴を構成するものと考えられる。土壌は住居中央部から検出された(SK01)。埋土はロームブロックが塊状に堆積し床下土壌と推定される。

壁溝は深さ5cmで北東側を除き巡っていた。

出土遺物は土師器環が1点と甕1点が検出されたに留まる。

第500図1は比企型環小片で口径は不安定である。2は小形甕で貯蔵穴内から出土した。時期は明確にできないが6世紀末葉～7世紀前半代には納まるであろう。



第500図 C区第86号住居跡出土遺物

C区第86号住居跡出土遺物観察表(第500図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	(13.5)	2.3		ABC	A	橙	5%	覆土 風化により赤彩不明
2	小形甕	(13.2)	19.9		ABC	A	浅黄橙	55%	貯穴内

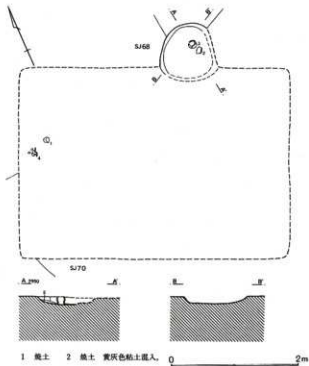
C区第87号住居跡(第501図)

G・H-25区に位置する。第68～70号住居跡の上面に構築され、カマドの一部が検出されたのみである。形態及び規模は不明。

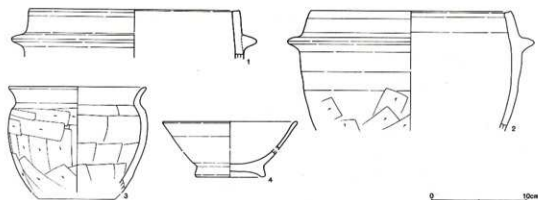
カマドは深さ10cm程で埋土は黄灰色粘土混じりの焼土が堆積していた。底面からは小形甕が倒立した状態で出土した。出土遺物は4点ある。

第502図1・4は第68号住居跡中に、2は第70号住居跡覆土上面から出土したもので本住居跡に帰属するものと考えた。

第502図1・2は羽釜。焼成は土師質、胎土に白色針状物質を含む。3は小形甕。4は土師質高台環。稲荷前XV期に比定される。



第501図 C区第87号住居跡



第502図 C区第07号住居跡出土遺物

C区第07号住居跡出土遺物観察表(第502図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	羽釜	(22.0)	5.0		ABC	B	浅黄橙	5%	No149 覆土
2	羽釜	(21.0)	12.5		ABCJ	B	にぶ難	15%	No157 カマド内 土師質
3	小形甕	14.2	11.0		ABI	A	にぶ橙	80%	No215 カマド底面
4	高台坏	(14.0)	5.8	(7.0)	AB	D	橙	40%	No189,192 覆土

(2) 掘立柱建物跡

C区第1号掘立柱建物跡(第503図)

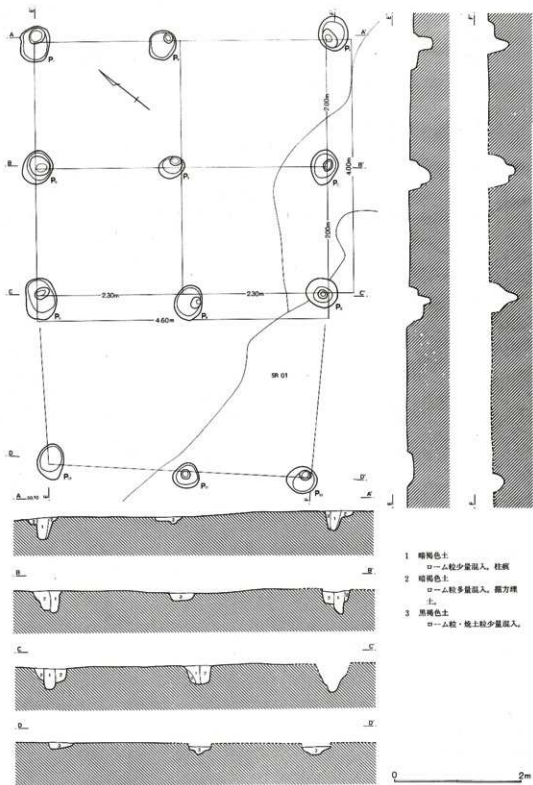
調査区西北部のD・E-19・20区に位置し、第1号周溝基の北周溝を切って掘り込まれていた。2×2間の総柱建物と考えられるが、建物南西側には3本のピット(P₁₀~P₁₂)が検出された。建物と一体のものとするには柱筋が揃わない。また庇とするには距離が離れ過ぎ、或いは建物に付随する棚列の可能性もある。建物の規模は桁行4.60m、梁行4.00mを測る。主軸方位はN-38°-Wを示す。

柱穴は円形プランを呈し、直径は50cm前後である。深さは30~50cmほどのものが主体を占め、P₉と東柱に相当するP₈は浅い。覆土は3層に分かれ、第1層は柱痕、第2層は掘り方埋土である。建物構造としては高床を想起させるが、北東側の中間柱は中軸線からやや外れ、東柱がやや貧弱であること、柱間寸法がやや広いこと等から必ずしも倉庫的な機能に限定することはできないかもしれない。

出土遺物は須恵器碗がP₉の覆土から出土した(第508図1)。遺構に伴うとは断定できないが一応古代の建物と考えておきたい。

C区第2号掘立柱建物跡(第504図)

D・E-22・23区に位置し、第9・33・34号住居跡、第9号溝跡と重複していた。新旧関係は住居跡よりも新しく、溝跡よりも古い。柱穴のうち3本は検出漏れで不明な点を残しているが、一応3×2間の東西棟の建物と考えて良からう。規模は桁行6.00m、梁行4.40m、柱間寸法はそれぞれ2.00m、2.20m等間となる。主軸方位はN-79°-Eを示す。



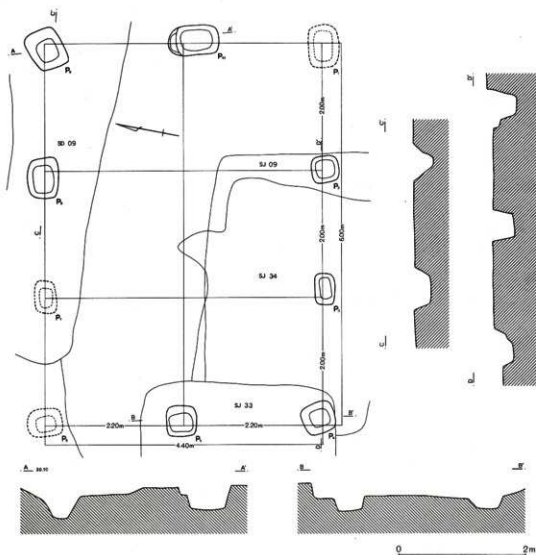
第503图 C区第1号掘立柱建物跡

柱穴は方形または隅丸方形プランで、長径は40～60cm前後と比較的規模は小さい。確認面からの深さは50cm前後と比較的深い。埋土の詳細は不明である。

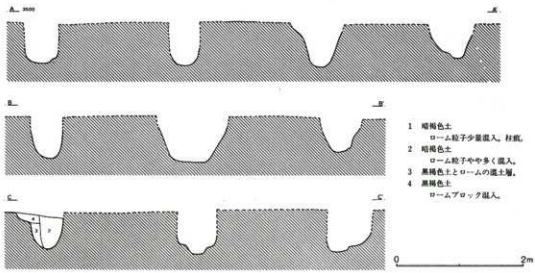
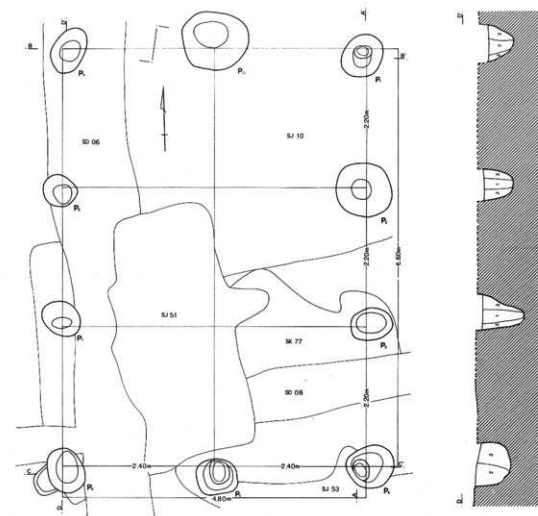
出土遺物は検出されず正確な時期比定はできないが、重複住居の年代から8世紀後半以降である。下限は明確ではないがおそらく10世紀初頭以前と推定される。

C区第3号掘立柱建物跡(第505図)

調査区中央部北寄りのE・F-24区に位置し、第10・51・53号住居跡、第6・8号溝跡、第77号土塙など多数の遺構と重複していた。新旧関係は第10号住居跡、第77号土塙よりも新しく、第51・53号住居跡や溝跡(中世)よりも古いものと考えられる。3×2間の南北棟の建物で、規模は桁行6.60m、梁行4.80mを測る。柱間寸法は桁行2.20m、梁行2.40m等間となり柱穴配置は整っている。主軸方位



第504図 C区第2号掘立柱建物跡



- 1 暗褐色土
ローム粒子少量混入、材底。
- 2 暗褐色土
ローム粒子やや多く混入。
- 3 黒褐色土とロームの混土層。
- 4 黒褐色土
ロームブロック混入。

第505図 C区第3号掘立柱建物跡

はN-2°-Eを示す。

梁行の中間柱であるP₉とP₁₀は隅柱を結んだラインから外に外れ気味となり、棟持柱的な構造をとる。柱穴は上面を削平されているものが多い関係で規模は一定しないが、遺存状態の良い柱穴で観察すると、形態は円形、または楕円形で直径70cm~100cm前後、深さは60~80cmと全体的に規模は大きく掘り込みも深くしっかりしている。

柱穴埋土は4層に分かれ、第1・2層が柱痕、または柱抜き取り痕と思われる。第3・4層は黒色土とロームの混土層で掘り方埋土と考えられる。

出土遺物はP₇から須恵器坏底部が検出された(第508図2)。形態と調整技法からみて8世紀後半段階のものとして推定される。重複遺構の年代から見て8世紀初頭前後~9世紀後半以前に位置付けられることは間違いなく、建物の構築年代を示す資料としても矛盾しないであろう。

C区第4号掘立柱建物跡(第506図)

E・F-24・25区に位置し、第3号掘立柱建物跡の東側約3mに隣接して構築されていた。第52号住居跡及び第8号溝跡と重複し、前者よりも新しく後者よりも古いことが判明した。3×2間の東西棟の建物で、規模は桁行5.70m、梁行4.50m、柱間寸法は桁行1.90m、梁行2.25m等間となる。主軸方位はN-85°-Wを示す。

柱穴は均等に配置されるが、桁行のP₂・P₃とP₇・P₈は隅柱を結んだラインよりも外側に外れ気味となっていた。柱穴は円形から隅丸方形を呈し、径は小さいものでも60cm、大きいものでは1mを超える。深さは50~60cmと全体に深く掘り込まれていた。

覆土は基本的に3層に分かれ、第2層が柱痕、または柱抜き取り痕、第3層が掘り方埋土である。第1層は上層を被覆しており建物解体後の埋土か。

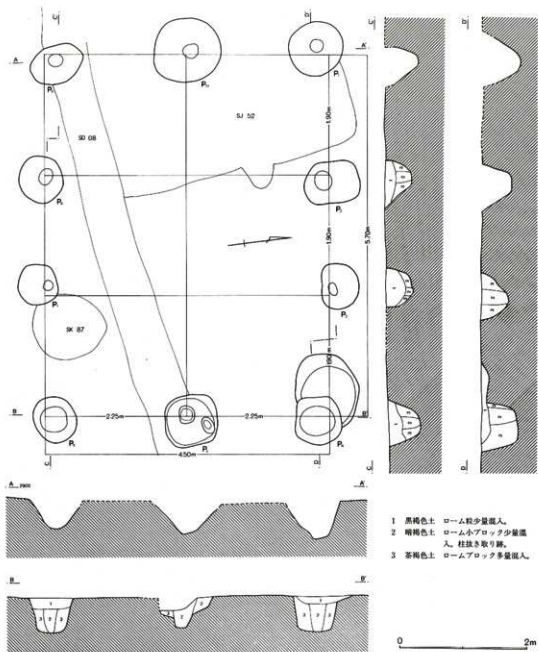
出土遺物は須恵器の椀かと思われる破片がP₇覆土から出土した(第508図3)。典型的なタイプと異なるため年代は確定できないが、作りはしっかりしており焼きも良い。9世紀までは降らないであろう。重複住居の年代観からは7世紀中葉以降、中世以前という限定しかできない。隣接する第3号掘立柱建物跡とは東西棟、南北棟という違いはあるにせよほぼ軸が揃い、両者は近接時期、或いは併存した可能性を考慮すべきかもしれない。一応8世紀後半を前後する年代としておきたい。

C区第5号掘立柱建物跡(第507図)

調査区中央部南寄りのG・H-21・22区に位置する。第41号住居跡、円形周溝状遺構(SX06)、第17号周溝墓を切って構築されていた。また、建物内部には中世の第22号井戸跡が位置する。3×2間の側柱建物で、規模は桁行7.20m、梁行5.40m、柱間寸法は桁行2.40m、梁行2.70mを測る。主軸方位はN-11°-Eを示す。

3間×2間の建物としては大型で、その分、柱間の間隔は長い。柱穴は均等に配置され形態は整っている。柱穴は隅丸長方形を呈し、北西隅柱のみ「L」字状に掘り込まれていた。柱穴の長径は70~80cm、深さは40~60cmと比較的大きく掘り込みもしっかりしている。

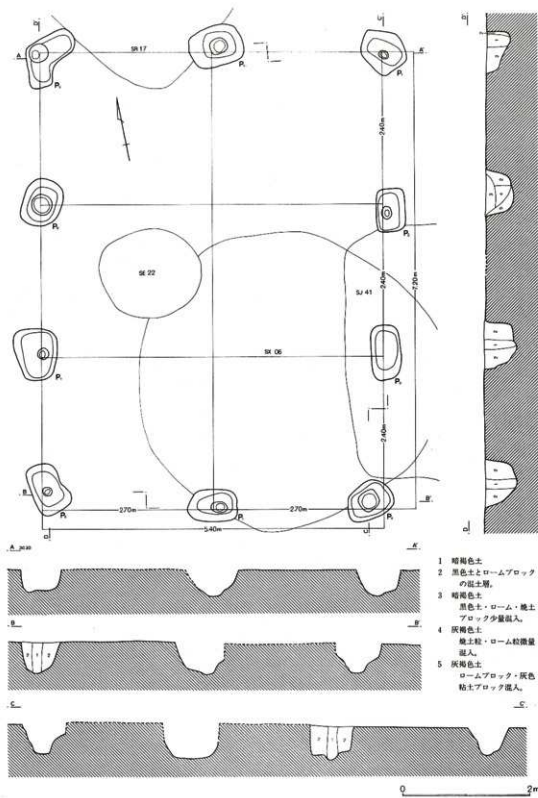
柱穴埋土は5層に分かれ、第1層は柱痕、第2層は掘り方埋土である。P₈はおそらく柱が抜き取



第506図 C区第4号掘立柱建物跡

られたものと思われ、土層は乱れていた。

出土遺物はP₂・P₄・P₅・P₃から須恵器環・椀・鉢と土師器甕が検出された(第508図5～9)。須恵器環、椀は8世紀前半代の特徴を具備している。重複住居の年代観からみても矛盾なく8世紀前半、稻荷前VII期頃に構築されたものと推定しておく。



- 1 暗褐色土
- 2 黒色土とロームブロックの混入層
- 3 暗褐色土
黒色土・ローム・粘土ブロック少量混入
- 4 灰褐色土
焼土粒・ローム粒微量混入
- 5 灰褐色土
ロームブロック・灰色粘土ブロック混入

第507図 C区第5号掘立柱建物跡

C区第6号掘立柱建物跡(第509図)

調査区中央からやや南東寄りのH-24・25区に位置し、南に第7号井戸跡が接する。3×2間の南北棟の建物で、規模は桁行570m、梁行5.00mを測る。柱間寸法は桁行1.90m、梁行2.50mとなる。主軸方位はN-8°-Eを示す。

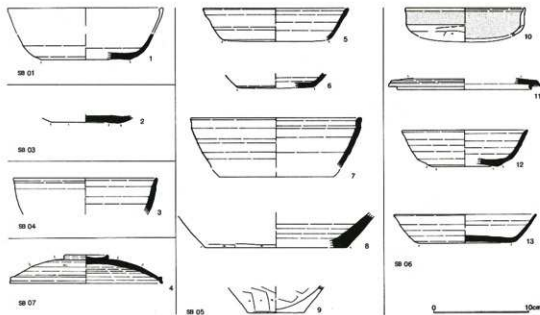
柱間はほぼ均等に揃うが、P₃が若干P₂寄りにずれていた。また、内部中軸線上にはP₁₁が位置する。柱痕は観察されなかったが建物に伴う可能性もあり、建物構造としては一部低床式となるかもしれない。柱穴は円形または楕円形を呈し、長径は50~80cm程である。深さは30~60cmとやや差があり、東柱に相当するP₁₁は深さ20cmと浅い。

柱穴埋土は4層に分かれる。第1層及び第1'層は柱痕、または柱抜き取り痕、第2層は掘り方埋土に相当しよう。

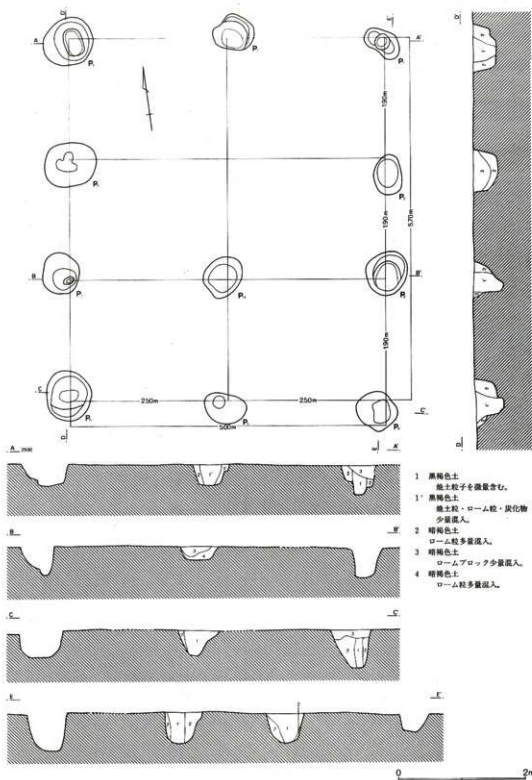
出土遺物は須恵器環、蓋、土師器環が柱穴覆土中から検出された(第508図10~13)。土師器環は7世紀前半、盤状の須恵器環(13)と特殊かえり蓋(11)は8世紀前半、12の環は8世紀中葉~後半か。出土状態が明らかでないため特定できないが、一応新しい遺物を基準に稲荷前VIII期頃の建物と考えておきたい。

C区第7号掘立柱建物跡(第510図)

調査区北東部のE-26・27区に位置し、第71号住居跡の内部に納まるように構築されていた。調査段階では建物と認識されず、残念ながら不明な点を多く残してしまった。柱穴は5本検出され、住居の周囲には類似したピットは検出されていないため、一応2×2間の建物と推定される。規模は桁行、梁行ともに3.60m、柱間寸法は1.80m等間となり、正方形の建物に復元できる。主軸方位は



第508図 C区第1~7号掘立柱建物跡出土遺物

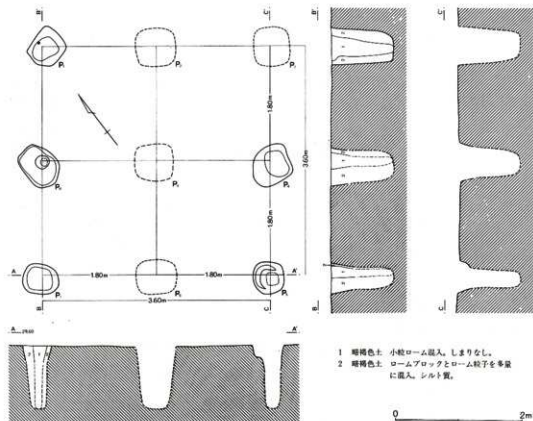


第509図 C区第6号掘立柱建物跡

N-38°-Eを示す。

柱穴は隅丸方形を基本とし、長径50~70cm程である。P₁の深さは1mにも達する。検出された他の柱穴は30~40cm程の深さで止まっているが、P₁の様相から見れば更に深くなるであろう。覆土は2層に分かれ第1層は柱痕、第2層は掘り方埋土である。P₁では柱痕が明瞭に観察された。柱間が1.80mと狭く、正方形の形態を採ること、柱穴が非常に深いことから堅牢な建物の下部構造と推定される。おそらく高床の倉庫と考えるのが最も妥当であろう。若し、そうであるとすれば束柱も本来存在した可能性もある。

出土遺物としては、高台状(リング状)鈕を有する須恵器蓋(第508図4)がP₈の掘り方から検出された。形態から見ておそらく8世紀中葉を前後する段階のものと思われる。重複住居は7世紀代であり、この須恵器蓋によって建物の構築年代を推定しても矛盾はしないであろう。稲荷前Ⅷ期を前後する頃の建物と考えておきたい。



第510図 C区第7号掘立柱建物跡

C区第1~7号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第508図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	地成	色調	残存	出土位置・その他
1	碗		2.6	(9.2)	ABC	A	灰	10%	S B01-P ₈ Na1 覆土
2	坏		0.8	7.3	ABC	B	灰白	95%	S B03-P ₇ 覆土
3	碗	(15.0)	3.8		ABC	A	暗青灰	10%	S B04-P ₇ 覆土
4	蓋	(16.0)	3.0		ABC	A	灰白	25%	S B07-P ₁ No.183 覆土(+4cm) 混入

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
5	坏	(15.1)	3.4		ABC	A	暗灰	5%	S B05-P ₄ 覆土
6	坏		1.5	(8.0)	ABC	A	灰	20%	S B05-P ₃ 覆土
7	碗	(17.8)	5.2		ABC	A	灰	10%	S B05-P ₄ No28 覆土
8	鉢		3.7	(15.0)	ABC	A	灰白	10%	S B05-P ₃ 覆土
9	甕		2.8	5.0	ABE	A	にじみ糲	15%	S B05-P ₁ 覆土
10	坏	(12.4)	3.0		ABC	A	にじみ糲	10%	S B06-P ₃ 覆土 赤彩
11	蓋	(15.8)	1.2		ABC	B	灰	5%	S B06-P ₄ 覆土
12	坏	(13.1)	3.8	(6.8)	ABC	A	灰白	15%	S B06-P ₄ 覆土
13	坏	(14.8)	3.0	9.6	ABC	B	灰白	45%	S B06-P ₄ SP78 覆土

(3) 竪穴状遺構

C区第1号竪穴状遺構(第511図)

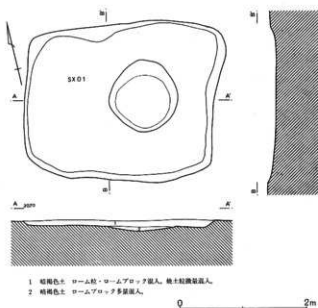
調査区西寄りのG-19区に位置する。形態は長方形で、規模は長軸3.10m、短軸2.50m、深さ0.10mを測る。主軸方位はN-75°-Wを示す。

底面は中央部に向かって徐々に深くなり、堅く踏み締められた様子は窺われなかった。壁の立上がりは緩やかである。

覆土は2層に分かれ、基本的にはローム混じりの暗褐色土で構成される。また、中央部やや東寄りの位置から直径1.10mほどの浅い土壌が検出され、埋土はロームブロックを主体とする黄褐色土で充填されていた。

カマドや炉跡、柱穴等の施設もなく、床面も通常の住居とは同一視はできないようである。一応竪穴状遺構として住居とは別の扱いにしておきたい。

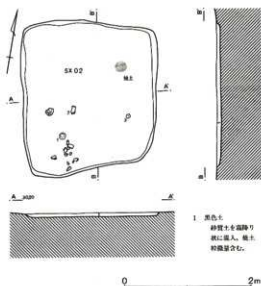
出土遺物は土師器甕と須恵器坏の口縁部小片が検出されたが、図化可能な遺物はない。遺物の時期は8世紀～9世紀代のものと思われるものの遺構に伴うとは断じ切れない。



第511図 C区第1号竪穴状遺構

C区第2号竪穴状遺構(第512図)

F-23区に位置し、第14号方形周溝墓の南溝上面に構築されていた。形態は不整形で、規模は長軸2.44m、短軸2.10m、深さは0.08mと非常に小規模で浅い。主軸方位は西壁に平行するものとするとN-12°-Wを示す。

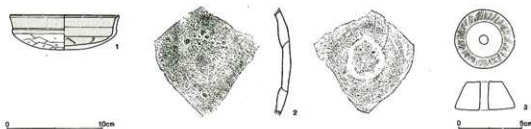


第512図 C区第2号竪穴状遺構

第512図 1は模倣坏系の比企型坏で赤彩が施されている。法量は口径11.3cm、器高3.6cm。胎土に石英・白色粒子・白色針状物質を含み、焼成は普通である。色調は橙で残存率は55%程である。註記No 1。覆土(+2cm)出土。

2は須恵器のフラスコ瓶胴部片か。外面には同心円状のカキ目が廻る。胎土に石英と白色粒子を含む。白色針状物質は認められないが在地産と思われる。色調はオリーブ黒。註記No 8。覆土(+2cm)出土。

3は滑石製紡錘車。直径4.7cm、厚さ2.3cm、重量70g。中心部に直径0.7cmの軸孔が貫通する。側面は櫛歯状の工具による擦痕が残る。註記No 6。床面出土。



第513図 C区第2号竪穴状遺構出土遺物

C区第3号竪穴状遺構(第514図)

調査区南端のM-27区に位置し、第19号溝跡に北東コーナー部を一部擾乱されていた。形態は不整方形で、規模は長軸3.26m、短軸2.82m、深さ0.13mを測る。主軸方位は北壁を基準にするとはほぼ座標北を指す。

床面はほぼ平坦である。覆土は5層に分かれ、黒褐色土を基調に構成される。

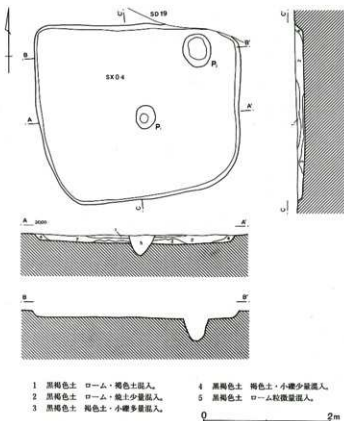
床面はほぼ平坦である。

覆土は焼土粒子を僅かに含む黒色砂質土で、土層変化は特に観察されなかった。また、中央からやや北東に寄った底面には僅かに焼土が散布していたが、掘り込みは確認されず炉跡とは異なるものである。

カマドや柱穴、貯蔵穴等の施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器坏と甕、須恵器坏と提瓶、石製紡錘車が検出された(第513図)。土師器坏は模倣坏系の比企型坏で口唇部内面に沈線が廻る(1)。提瓶は伴う可能性もあるがよく判らない。一応土師器坏から7世紀後半を中心とした時期と考えておきたい。

第513図 1は模倣坏系の比企型坏で赤彩が



第514図 C区第3号竪穴状遺構

(4) 井戸跡

C区第1号井戸跡(第515図)

E-27区に位置し、第71号住居跡と壁同士が接していた。掘り込み上面の形態は方形で、中央部に楕円形の井戸が掘り込まれていた。断面観察からは明瞭に把握できなかったが、方形竪穴状の掘り込みは掘り方と見ることもでき、地上に何らかの施設(井戸側)が存在したことも予想される。

上面の規模は長軸3.60m、短軸2.88m、深さ40~50cmで、西壁側にテラスをもつ。井戸本体は長径1.74m、短径1.25m、深さは1.50m以上となるが、湧水が激しく完掘できなかった。

覆土は5層に分かれる。確認面付近(第1層)からは多量の小礫が検出された。井戸埋没後の窪みに投げ込まれたものと考えられる。下層は青灰色の粘質土に移行する(第5層)。

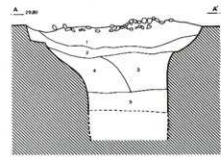
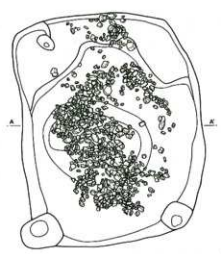
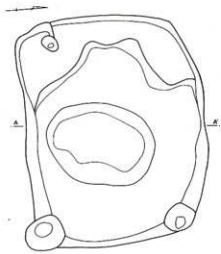
出土遺物は土師器環、甕、須恵器環、高台環、壺類、甕がある(第515図)。1は比企型環で混入と思われる。2は形態から武蔵型甕の承譜に乗る土器と思われる、胴部上位は横方向のケズリが施されている。3の須恵器環底部には墨書があるが、判読できない。4は高台環で、傾きに不安があるが、高台は底部外縁の屈曲点からやや内側に付され、外に踏ん張っている。7の短頸壺は肩部に丸みが見られる。

出土土器は8世紀前半~後半頃のものが含まれている

ビッドは2本検出された。P₁は遺構に伴うものではなく、P₂の帰属は不明である。カマド等の附属施設は検出されず住居跡とは断定できなかった。

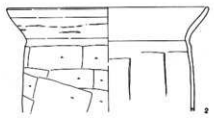
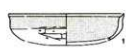
出土遺物は土師器甕と小形甕の胴部片が出土したのみで、図化可能な遺物はない。

出土遺物から見る限り7世紀~8世紀頃に位置付けられるものと推定されるが遺構の年代を直接表すかどうかは判らない。



- 1 暗褐色土 ローム粒・礫多量混入。
- 2 黒褐色土 ローム粒・砂粒混入。
- 3 黒褐色土 混入物なし。
- 4 黒褐色土 混入物なし。粘質。
- 5 青灰色土 粘質土。

0 ————— 2m



0 ————— 10cm

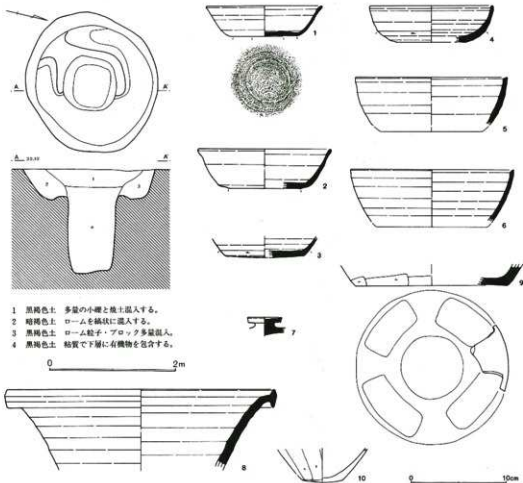
第515图 C区第1号井戸跡・出土遺物

C区第1号井戸跡出土遺物観察表(第515図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	構成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.0)	2.8		ABC	A	にぶい	10%	SX02-覆土 赤彩
2	甕	(21.0)	10.9		ABE J	A	にぶい	25%	SX02-No25 覆土
3	坏		0.6	(7.4)	ABC	A	浅黄粒	15%	SX02覆土 底部墨書がある 判読不明
4	高台坏	(13.2)	3.2	(8.4)	ABC	A	灰	15%	SX02No10 覆土 底部回転ヘラケズリ
5	壺	(22.0)	4.7		ABC	A	灰	10%	SX02覆土 頸部外面叩き後ロクロナデ
6	甕		8.0	(14.0)	ABC	A	灰	20%	SX02-No38 覆土
7	短頸壺	(11.6)	5.0		ABC	A	灰	15%	SX02-No39 覆土
8	甕	(22.0)	6.9		ABC	A	灰	15%	SX02-No7 覆土
9	甕	(21.0)	8.2		ABC	A	暗灰	45%	SX02 覆土

C区第2号井戸跡(第516図)

F-23区に位置する。井戸本体の周囲に40cmほどの深さのテラスをもつ。上面形態は円形で、規模は直径2.28mを測る。井筒部はやや隅丸気味の円形プランを持ち直径は0.54m、底面までの深さは



- 1 黒褐色土 多量の小礫と焼土混入する。
- 2 暗褐色土 ロームを塊状に混入する。
- 3 黒褐色土 ローム粒子・ブロック多量混入。
- 4 黒褐色土 粘質で下層に有機物を包含する。

第516図 C区第2号井戸跡・出土遺物

1.62mである。

覆土は4層に分かれる。第2・3層はロームを多量に含み掘り方部分と考えられる。おそらく井戸側が存在したものと見て誤りないであろう。

出土遺物は須恵器環、椀、蓋、甕、甗と土師器甕が検出された。かなり時期幅のある土器を含み、環で見ても第516図1は稻荷前X期、2はVIII期、4はV期及至VI期頃と思われる。覆土中層から出土した1を埋没段階の遺物とすると稻荷前X期以前、VIII期前後に機能したものであろうか。

C区第2号井戸跡出土遺物観察表(第516図)

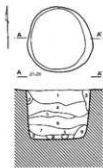
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	装成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	21.0	3.2	6.7	ABC	A	灰	90%	No32,33,35 覆土中層
2	環	(13.8)	4.1	(7.6)	ABC	A	灰	25%	No17,19 覆土上層
3	環		2.2	(8.4)	ABC	A	灰	25%	No12 覆土
4	環	(12.8)	3.8		ABC	A	灰	15%	覆土
5	輪	(15.8)	5.0		ABC	A	灰	10%	覆土
6	椀	(17.0)	5.5		ABC	B	灰白	10%	No90 覆土 口唇部内面磨滅
7	蓋		1.8		ABC	A	灰白	90%	No27 覆土 鈕はほ完存
8	甕	(28.0)	8.4		ABC	A	灰	10%	No64 覆土下層
9	甗		2.2	(16.0)	ABC	B	灰	10%	No59 覆土 底部孔数不明
10	甕		3.6	4.3	ABEJ	A	橙	70%	No24 覆土上層

C区第3号井戸跡(第517図)

調査区西部のH-18区に位置する。第19号住居跡と切り合い、新旧関係は本井戸跡の方が新しい。形態は円形で、規模は直径1.00m、深さは1.05mと井戸としては浅い。ほぼ円筒状に掘り込まれ、底面は平坦であった。

覆土は9層に分かれる。全体に暗褐色から黒褐色土で構成され、ロームが比較的多量に含まれていた。

出土遺物は須恵器環、蓋がある(第517図)。何れも8世紀前半代に位置付けられるもので、或いは重複する第19号住居跡からの流入遺物かもしれない。時期は8世紀前半以降とするしかなさそうである。



- 1 黒褐色土 粘土粒子を微量混入。
- 2 暗褐色土 ローム粒子をやや多く混入。
- 3 黒褐色土 ロームブロックを混入。
- 4 黒褐色土 ローム粒子・粘土粒子を少量混入。
- 5 暗褐色土 ローム粒子をやや多く混入。
- 6 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを混入。
- 7 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。
- 8 黒褐色土 深褐色、ローム粒子を微量混入。
- 9 黒褐色土 ロームブロックを混入。



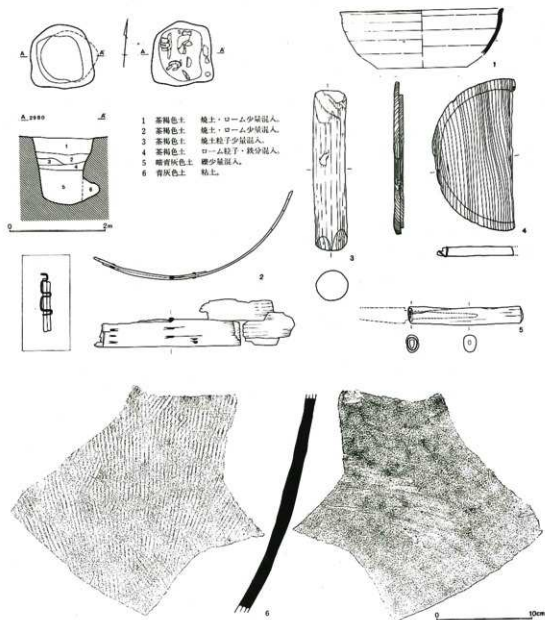
第517図 C区第3号井戸跡・出土遺物

C区第3号井戸跡出土遺物観察表(第517図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	(17.0)	1.4		ABC	A	灰	10%	覆土
2	坏		2.4	(10.0)	ABC	A	にじみ	15%	覆土

C区第4号井戸跡(第518図)

H-24区に位置する。第4号溝跡に上面を削平されていた。形態は不整形を呈し、規模は直径1.02



第518図 C区第4号井戸跡・出土遺物